
麻帆良に忍！

XYZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に忍！

【Zコード】

N14070

【作者名】

X Y Z

【あらすじ】

インチキ忍者が麻帆良で色々やる話。多分に「」都合主義でテンプレ。アンチなしの予定。ヒロインは楓です。

第一巻・題者、ハシヅヤヒルル。の巻（前書き）

氣分転換の新作でござります。

あらすじ通り、インチキ忍者が麻帆良で色々やる話。
アンチとかそういうのは無い予定。ご都合主義でテンプレ通りやり
ます。

ヒロインは楓。

第一巻・拙者、一ンジャヤレル。の巻

甲賀中忍・長瀬楓が『彼』と出合ったのは、まだ小学校の頃。

その頃は彼女も麻帆良におらず、山奥にある忍者の隠れ里にて修行中の身であった。

最も、それでも彼女は歴代最年少の中忍・甲賀における最高位・になるだろうとして

注目の的であり、彼女自身もそつなるべしと慢心する事無く修行に打ち込んでいたのである。

そんな夏のある朝の出来事。

鬱蒼と繁った山林にて朝食を調達していた彼女は、歩いている1人の少年を見かける。

身長は自分より低いが、自分の身長が同世代と比べて高いのは自覚している為、

年齢までは判断できない。

ただ、顔つきを見ればまだまだ子供であり、品のよさが見られる節がある。

服装は大よそ山登りに適した格好とはいえず、何しろ、どう見ても普段着だ！

背中に背負ったバックパックがなければ迷子か何かかと勘違いしてしまいそうである。

いや、実は遭難してゐる可能性も捨てきれないが、それにしても落ち着き払つてゐる。

詰まる所、『彼』は自分の意思でここまで歩いてきたのであらう。それだけでも感嘆するべき事であると彼女は関心する。

ここから一番近い村でも普通ならば一戸がかり。

更に言つならば、この辺りは既に隠れ里の領域内に入っているのである。

つまり、侵入者撃退用の罠が張り巡らされているところ。勿論、ただの登山家などが迷い込んでしまって大惨事を引き起しきれないよう、最初の方はそれほど深刻な罠を張り巡らしている訳ではない。だが、この辺りともなれば足の一つ、腕の一つは覚悟しなければならぬよつた罠も混ざつてきているのだ。

それにも関わらず、『彼』は見たところ擦り傷などはあるものの大怪我を負った節はない。

となれば、何らかの手段を持つて潜り抜けてきたのだ。

「さて……どうしたものでござりますな。」

誰とはなく呟く彼女。

ここまで近づいてきた以上、ただの登山客とは思えない。

ただ、侵入者と言つには殺氣などがなさすぎる。

自分が知る限り、取り立てて隠れ里に後ろ暗い所は無いはずではあるが、

どこで恨みを買われてるか分からぬのが忍者と言つ職業（？）である。

もしかすれば、斥候の類の可能性も捨てきれない。

木の枝の上で悩んでいると、少年から声をかけられた。

声変わりもしていない声だ。

「おこ、やこのためめえ。いつまで人の事じろじろ見てやがんだ？」

気づかれていた！？

驚愕する彼女。これでも気配の消し方は隠れ里でも1・2を誇る。彼女がその気になれば、野生の動物すらも騙しきるだけの隠行術を行使できるのだ。

だが、こつなつては不審者度が上昇するのもやむを得ず。手持ちの武器だけでは心許ないが、そもそもここは自分の庭のような場所である。

イニシアティブはこちいらにある。そう思った彼女は姿を晒さずに声をかける。

「いやいや、まさか見つかるとは思つていなかつたでござるぬよ。これでも隠れる事に自信はあつたんでござるが。」

「はつ、安心しろよ。オレも気が付いたのはつこぞせつきだ。いつから見張つてやがつた？」

「ふむ、見張られては困ることもあるのでござるかな？」

少年は立ち止まつた状態のまま、じつと動いてもしない。

「いいや、全くと言つて後ろめたい事なんて無いけどな。ただ、ストーカーみたいに付きまとわれるのは勘弁な、と言いたいだけさ。

で……人つ子一人いなはづの山奥で声をかけてきたてめえは何だ？天狗か？忍者か？」「む……」

確かにその通りである。

まだまだ修行が足りないでござるなあ、と自戒しつつ彼女は反論する。

「しかし、いきなり天狗と忍者の一択はないんではないでござるか

な
?

善良な一般市民の可能性もあるで、」やうに。」

「ほーか、善良な一般市民が木の上で気配隠して立ってるものか。冗談も本気本気聞こえー。

「諂ひも休み休み言えよ」

「アーニー、おまえがアーニーだ。」

「OK、そろそろこの問答も面倒になつてきたから単刀直入に聞く

「ゼ？お前忍者だろ？」

いつまでも続く問答に飽きたかイラついて来たか、少年が質問の方
向を変える。

「ふむ、こちなり断定されても困るのでは? やるが……」

らそつちが詐欺だ。

「假に拙者が忍者としてどうあるべきでござるかな?」

返答次第では、ここで一戦も想定する必要がある。

一方の少年は自然体。

「！」の辺に忍者の隠れ里があるって聞いてな、案内してくれると嬉しいんだけどよ。

流石にこの眼の数は通るのに苦労したぜ……」「

まさか天然の結界まではあるとは、さすが忍者と感心する少年。だが彼女としてはそれどころではなかつた。

隠れ里が見つからないのは前述の罠の前にある、その『結界』のお陰ともいえる。

もつとも前述したように100%何者も通さないわけでは無いのだ

が……

意図的に乗り越えるならば、相当な労力を覚悟する必要がある。

「して、如何なる用事で」「ざるかな？」
と言つたが、お主は分かつてながらもその問答を吹っかけた訳でござるな？」

「当たり前じやねえか、本当に天狗だつたらどうするんだよ。
で、用事はそう難しい事じやねえ…………ちよつとした武者修行つてやつだ。」

「まづ……」

感心しながらも同時に呆れる彼女。

今時武者修行などとは、いつの時代に生まれたんで」「ざるか、彼は。
などと思いつつ。

「では、まずは拙者がお相手するで」「ざる。」
「おこおこ、マジか？」
「まさか、女は殴れないなどと言わないで」「ざるひつな。」

少年は困った様子もなく頭を搔いて一言。

「…………いや、もう決着付いてるしよ。」
「何を……」

そこまで言いかけて、身体の異変に気が付く。
全身の力がまるで抜けていくかのような感覚。

「毒…………で」「ざるか。」

「『忌法・彼岸花』ってな。ちょっと無色無臭の神経に作用する薬
品を空氣に流しただけだ。」

風なんかであつさつ「」破算になるような代物だよ。心配すんな、命まではとりやしねえよ。」

「「れでも…… 毒の耐性はつけておるんで」「やれるが、……」

そこまで言つて、立つていられなくなり下へと落ちる彼女。地面に激突する瞬間に少年が抱きかかえ、そして彼女をそっと地面に横たえる。

「幾ら毒の耐性つたつて地球上全ての毒つてわけでもねえだらうつな。

オレだつて網羅しきつてねーよ。と言つたが、普通はこの術喰らつて喋れねえよ。

ま、取りあえずこいつ飲んだけ。解毒剤だ。」

そつと、ズボンのポケットから包み紙に入った粉薬を取り出す。

「拙者、動けないんで」「やるがなあ…………」

「あ、わりい。」

普通ならば毒殺の可能性も疑つべきであらうが、流石に「」でそれは無いだらう。

そんな手間を掛けなくとも、幾らでも殺す手段は存在する訳で。

「ま、口は動くみたいだから流し込んだり問題ねえな?」

「……口移しでござるか?」

「して欲しいのかよ?」

そんなおバカなやりとりをしつつ、数分後には無事に動く楓の姿があつた。

軽く身体を動かしながら、少年に尋ねる。

「それでお主、忍者なので、『わ』るか？」

「あー、一応忍者って事になるんじゃねーの? 何かの爺さんもやつ
言つてたしよ。」

「こや、忍法と言つてる以上は忍者じゃないと聞こ出したら詐欺で
『わ』り、それは。」

それもやつだな、と笑う少年。

この時だけは歳相応の笑顔に見えた、と後に彼女は語る。

「で、案内してくれるんだが、忍者の隠れ里。」

「勝負に負けたのは拙者で、『わ』ぬからな。少なくとも悪人にも見え
ぬし、案内するで! 『わ』るよ。」

しかし、この流れにならなければビリあるつもつで『わ』ったか?」

どう考へても薬を撒くタイミングを考えれば、自分と話をしている
ときである。

そう彼女に問われて、困ったように頭を搔く少年。

「あー……勘だ。」

「は?」

「だから勘だよ。ここは戦闘になるな、と思つて事前に撒いてお
いた。」

いーじやねえかよ、結果オーライなんだからさ。」

そっぽを向きながらやつこいつ少年に、彼女は思わず呆れてしまつた。
意外と出たとこ勝負で『わ』るな、と。

「まあ、確かに済んだ話で『わ』ぬし一向に拙者も構わん訳で『わ』る
が……。」

お主、名前は何と言つてやるか？」

「人の名前を尋ねる時は、まず自分の名前を先に名乗る物。オレはそう聞いたぜ？」

確かにその通りと言えばその通りである。

そして、彼女の名乗りを聞いてから、少年は名乗った。

最も、この時は長い付き合いになるなどとは思つていなかつた彼女ではあつたが……。

「駒井翔太。特に流派は無いが、一応忍者だ。改めて宣しくな」

そして、時は過ぎ舞台は麻帆良学園都市へと移る。

麻帆良より少し離れた山中にて。一つの影が動いていた。

一つは忍び装束を着た長身の女性、もう一つは私服のままの小学生のようないい少年。

木々を渡りぶつかり合いつつの影の実力は、大よそ拮抗しているといつて良い。

ただし、戦力比は16:1。女性が16で少年が1である。

影分身。女性・長瀬楓・が得意とする忍術であり、実体と同じ密度なら6体まで作成可能。

こうも密度がある分身を作る事が可能となつたのも、少年・駒井翔太・との訓練成果である。

最も、彼自身は全くと言つていいくほど影分身の類は使えないのではあるが……。

「何でそんな事が出来るんだよ。」

と言つのが翔太の主張である。

本来分身の術とは高速移動による残像を見せる事により、相手をかく乱させる術だと。

しかし、楓は思つのだ。

「（何故あそこまでやつておいて、これが出来ないのかが不思議で仕方ない）」「さる。」

と。どうして彼女がそう考えるのか？それは……

「だあつ、鬱陶しいつ！…一気に決める！『忍法・疾風怒濤』つ…！」

いい加減16対1と言つ戦力差に嫌気が差したのか、翔太は両手を左右に広げると独楽の様に高速回転。まるで重力など無いかのように自在に空を駆け、次々と分身たちを撃墜していく。

その回転が終わつた時、本体を残して全ての分身が全滅していた。

「しかし、いつ見ても非常識極まりない忍術でござるな……本当に忍術でござるか？」

「何言つてやがる、前にも言つただろうが。『ファンタジーな忍術』だつてよ。」

そう嘯く翔太。

どうやればあんな動きが可能なのか？楓には見当がつかない。だからこそ影分身ができるのが不思議でしようがないのだ。一度だけ、その忍術はどうで習つたのかを聞いたことがある。

「あ？ うちの爺さんが忍者でな。オレに才能があるつひとつ叩き込んで逝きやがつた。

親父もお袋も『忍者なんて今時流行らないから止めときなさい』って反対してゐるんだけどな。」

とは言え、もう馴染んじまつてゐし今更捨てられねえよ。

と語つた時の翔太の顔は、どこか遠い風景を思ひ起つてゐた。

この麻帆良に来たのも親の干渉をはねのける為だと何かの話の流れで聞いた事がある。

「で、どうするよ？ ここで終わるか続けるか？」

「そんな決定権がお主にあるで！」やるかな…………？」

再び流れ出す緊迫した気配。しかし、それもすぐに霧散した。

「ふう………今日の所はここで止めておくで！」やるかな。

「だな。いい加減俺も帰らないと明日がやべえ。」

そう言つて双方、構えを解く。

「しかし、やつぱり影分身は習得した方がいいと思つので！」やるかな

……

「るせえよ。わかんねーしきねーもんに手を出さない、自前の技を鍛えた方が建設的だぜ。

まあ、対人で加減して使える忍法の方が少ないと言つのが困った話なんだがな。」

そう言つて大して搔いていない汗拭いつ頭を搔く翔太。
昔からちつとも変わってない光景だ、と楓は思うが口には出さない。

初めて出会った時から全く身長が伸びないのは、彼女から見ても氣の毒の一言である。

身長どころか、顔つきまであの頃と殆ど同じ。

ぶつちやけてしまえば、小学生料金で公共施設などを利用できるレベルだ。

……まあ、潜入工作となると小さい方が便利なのが。

「確かにそうだ」「やるなあ。駒井殿の忍術？は殺しあうにしても物騒すぎる術。

少なくとも、人間に向けるにはちと過剰すぎる火力もあるで」「やるからなあ。

一体『何』にその力を振るわせるつもりで駒井殿の祖父殿はそれを教えられたので」「やろううか？」

「人の忍術を疑問系にするんじゃねーよ。

と言つたが、名字で呼ぶなつたろうがこのバ櫻。後ろ髪引っ張るぞ」「ア？

……まあ、爺さん曰く『人でなしに振るひ忍術。その時が来れば分かる』だそうだが。「

あの時「天狗か？」と言つ選択肢があつたのもその為なのであるつか、と楓は思う。

もつとも、仕事人よろしく法で裁けぬ悪を討つ可能性も無きにしも非ずだが……。

「てか、来てもらわねえと俺が困る。でないとあの地獄の幼年期が浮かばれん。」

「…………難儀してたで」「やるなあ。」

遠い目をしてそう語る翔太。

あの武者修行も死んだ祖父の遺言だったようである。

最も、「知りたい事は本当に墓場まで持つて逝さやがつた」 そういうあるが。

「本当にそんなのと出会つたら是非教えて欲しこじで」「ざれぬよ。 指者も多少興味があるで」「ざれぬ。」

「馬鹿言つてんじやねえ、お前にそんな危ない奴とドンパチさせられるかってんだ。」

と言つたがだ、お前ほんとに忍者隠してゐるのか？その口調で？」

そっぽを向いて無愛想に翔太は拒否するが純粹に楓のことを心配してのこと。

それがわかつてゐるので、楓も話の転換に乗つかる事にする。

「無論で」「ざれる。 指者の偽装は完璧で」「ざれるよ、ほんにほん。」

「嘘ふつゝじややがれ。」「ざれる」「ざれる」とてバレねえわけがねーだろ？」「

実際の所、楓は同室の鳴滝姉妹に初歩の初歩レベルで教授してたりするが。

「さて、そろそろ本氣で皿屋に戻らないとバイトがやばい。今から帰つたら……… 1時間ほどしか寝れねえじゃねえか。」

「なら」「」で泊まつてこへど」「ざれるか？ 今なら指者と一緒に寝れるで」「ざれるよ？」

指折り数えて確認してげつ、と言つ顔をする翔太に提案してみる楓。

「ばーか、それこそ間に合わなくなつちまつ。 それにそつぱつの結婚してからだつづーの。」

「相変わらず妙な所で古風なんで」「ざれぬな。 といふか、何故間に合

わなくなるで、『なぜか？』

ふと気が付いてにやりと笑みを浮かべる楓。

しかし、翔太は動搖することもなく言い放った。

「そりやお前……一緒に寝るとか俺が我慢できなくなるからに決まってるじゃねえか。」

「つ！」

余りにも全力ストレート過ぎて逆に顔が赤くなるのが分かる。言つた本人もその事に気が付いたか、真つ赤な顔だった事を追記しておく。

「じゃ、そろそろ行くぜ。またな、楓。」

「また明日……今日でござるがな、翔太殿。」

そう言つて、忍は去つてゆく。木々を渡りながら。それを見送つてから、彼女も眠る事にする。

いい夢が見れることを願つて。

これは、ある1人の忍者の青年の物語。

『英雄の息子』が彼と出会うのは、まだ先の話……。

第一巻・趙者、一ンジャヤルる。の巻（後書き）

› 山奥の～

勿論そんな設定はございません、でつち上げました（え
まあ、山奥で育つたことは間違いないんですけどね）。

› 中忍

この頃は彼女は中忍になつておりません。

小学校卒業と同時に中忍になり、麻帆良に行かされたとお作品では
しております。

どつかの最年少魔法先生と同じような理由ですね、きっと（え。
あるいは「世界は広いから見て來い」みたいな）

› どこで恨みを

モノホン忍者なら何らかの作戦活動には従事しているだろ（え、と言
う考え方です。

産業スパイとか、諜報活動とか。
にしては、最高位の中忍である楓でも裏の世界には疎かつたと言つ
てるわけですが……

恐らくは楓には知られていなかつたと言つ事でしょう。知る前に麻
帆良に来たでも可。

› 6体

原作では4体ですが、当作品では修行の成果により6体まで可能と
なつております。

更に言えば、16体は上限ではございません。

あくまで、動かしやすいのが16体と言つ事になつております。

› 忍法・疾風怒濤

ゲルマン忍法とは全く関係の無いことを口に出しておやめなや（え

10 / 6

キャラ名の変更。よそ様ともろ被りで「やれこました。

12 / 6

ちよひつと訂正したり。

と直つか、キャラ名直したはずが直ってなかつた。死にたい。

第一巻：バイトと猫とストーカーでござるの巻（前書き）

お待たせしました、第2話で『ぞい』います。
別名、原作介入フラグ構築ターン（え

ちゅうつとだけせつちゃんに厳しいかも。

第一巻：バイトと猫とストーカーで1泊2日の巻

麻帆良学園女子中等部2・A・出席番号8番、神楽坂明日菜が彼と出合ったのは1年の頃。

生活費と学費を稼ぐ為にアルバイトをする事になった明日菜。その彼女と同時期にバイト先に入ってきたのが彼・駒井翔太・である。

最初に見た時は、どうしてこんなガキンチョがと思ったものだ。同学年と聞いて平謝りしたが。

何しろ、クラスメイトの鳴滝姉妹と同じような身長しかないのだ。間違えた明日菜に罪は無い。

後に、彼自身は相当気にしているらしいと明日菜は知ることになる。ある時は「なあ、ぶら下がり健康法って本当に背が伸びるのか?」と真面目な顔して聞かれ、またある時は牛乳1パックを一気飲みする姿を叩撃し。涙ぐましい努力は傍から見ていても同情を誘う姿である。小学校の頃からやっていると知つて(そして成果が全く上がらない)なおさら涙したことは言つまでも無い。

ふとある時、明日菜は尋ねてみた事がある。

「ねえ、翔太。なんでそんなに身長が欲しいの?」

と。何故明日菜が彼を名前で呼ぶのか。無論、二人が深い仲な訳ではない。

彼がそう呼べ、と言つたからだ。

「名前で呼ばれるたびに『ここに本当に小さい』って顔に浮かぶのを見る気持ち分かるか？」

本当なら名前だって改名したいくらいだぜ……」

と言つのが彼のその時の主張。

その日以来、明日菜は彼を名前で呼ぶことにしてる（呼び捨てなのは）愛嬌、と言つ奴だ）。

そして、身長に関する彼女の質問に彼はこいつ答えた。

「許婚の身長がオレ以上でな……かつこつかねえじゃねえか。色んな所でよ。」

意外と看得張りと言つが、許婚とはいきなりぶつ飛んだわね、とは明日菜の感想。

彼女とて、人の色恋沙汰に興味が無いと言えば嘘になる。

「へえ、どんな子？」

「写真あるけど見るか？」

そう言つて、翔太は定期入れに仕舞つてある写真を取り出して見せる。

どこかの自然溢れる村の一角で取つたと思われる写真。

この頃から身長全く変わらないんだ、などと明日菜が失礼な事を考えたのは一瞬。

その彼の隣で微笑む相手を見て思わずええーーと叫んでしまった。

そこに『写つて』いるのは、どうみてもクラスメイトの長瀬楓だったのだから。

「どうしたよ、こきなり？」

「だ、だってまさかうちのクラスの長瀬さんとか普通想像しないじゃない！」

「それもやうか……ってか、同じクラスかよー。」

思わず繋がりにびっくりする翔太。

そんな彼に、明日菜は気になつてた事を聞いてみることにした。

「ねえ、こんな事聞くのもなんだと思つんだけビ……長瀬さん、つて忍者？」

「…………何でそう思つたよ。」

「だつて、ほら。『いざる』とか『にんにん』とか言つてゐじゃない。

本人に聞いても何のことぢやざるかな、つて煙に撒かれるだけだし

……

思わず頭を抱えそつになる翔太。「あのバ楓…………」と呟いた声は彼女には聞こえず。

「本人が話したくなつて言つなら、オレがとやかく語る事でもねーだろ。

その気になりやこいつか話してくれると思つぜ。オレはな。」

「ま、そもそもやうね。それで、どうこう駄れ初めて許婚とかなつてるの？」

「…………何だ、神楽坂もそつこつ事には興味あんのか？」

「どうこつ意味よ、それ……」

思わずジト目で睨みつける明日菜。

繰り返すが彼女とて女である。色恋沙汰に興味が無いと言えば嘘になる。

ましてやクラスメイトの事なら尙更のこと。

「まあ、なんつーか。あいつの故郷に行つた時にあいつと出合つたのが始まりでな。

んでもつて、向こうの家人に気に入られてな。その流れで婚約つて形になつたわけだ。

勿論、オレもあいつもお互い納得済みでだぜ？」

彼の言つている事は大よそ間違つていない。

（武者修行で）楓の村に行つて出会い、（そこで忍者としての才を見せて）向こうの家の人に気に入られたのだから。もつとも、人格的にも問題が無いからこそ許婚なわけだが。

「へえ、それいつの話？」

「えーと……去年じゃねえ、一昨年の話だな。」

「一昨年つて、まだ小学校じゃない！！」

「いいじゃねえか、許婚とか決める事に年齢なんか関係ねーよ。つか、許婚つて決まつてる

だけで別に疚しい事はしてねーぞ？」

「そ、なんだ……」

楓からは「鋼の自制心で」「ざるな」と言われるくらいである。

最も「結婚したら幾らでも可愛がつてやるよ」等と言い返してお互い赤くなってしまうのだが。

そもそもにして二人はまだ中学生。

確かに忍者、それもクノイチと呼ばれる存在にとつては枕事は欠かせない技能はあるが、

楓は生糞の忍者として技を叩き込まれており、その辺りの技能は持つていないのである。

「でも、良いわよねえ。好きな人と一緒になるって決まつて。私も高畠先生と……」

「あー…………まあ頑張ってくれや。」

妄想という名のあっちの世界へ行きかけてる明日菜にまたか、と呆れる翔太であった。

まあ、とは言え「まだ始まつたよ…………」位のレベルではあるが。

ガイノイド・絡繆茶々丸が彼と出会つたのも1年の頃。

それは、大木の上に登つて降りられなくなつた猫を助けようとした事から始まる話。

スラスターを吹かし、上昇しようとする茶々丸を止めたのが翔太だ。体格、身長から小学生かと推測するが、着ている制服とクラスメイトの双子から類推して

恐らくは同学年であるう事と茶々丸は最終的に判断する。

「何故止められるのですか?」

「…………お前、そんな爆音上げて近づいてみる。猫がびびっちゃうだろうがよ。」

言われてみればその通りだと彼女は判断する。

次のメンテの時にはハカセにスラスターの音をビックリかして貰おうとメモリーに記憶しておく。

しかし、今は現状でどうにかするしかない。

「ま、ここはオレが行ってくるから黙つてみてなつて。」

まるでちょっと散歩に行つてみると、言わんばかりの調子で、ひょいと木を登つて行く。

その身こなしはまるで忍者をながらである。

同じような身こなしをするクラスメイトがいた事を思い出す。

『彼女』と同様に忍者、またはそれに近い人物であると推測する。

そういう感じの内に、無事に猫を助け出して降つてきている翔太。

「ほらよ、お前に渡しておくれ。」

「…………宜しいのですか？」

助けたのは自分ではなくて、彼なのだ。

ならば、その猫（首輪が無い事から野良猫だらうが？）の所有権は彼にあるはずだ。

「宜しいも何も、助けてどうひつするつもりだつたんだらうがよ？」
「いえ、その…………」

実の所、茶々丸に助けた後びつあるかと言つ明確なビジョンがあつたわけではない。

ただ、降りれなくて困つてゐるよつだから助けよつ。やう判断しただけの事。

渡されて困惑している様子の彼女（と言つても、そこまで表情に変化があるわけではない）を見て取つた翔太は溜息を付いて頭を搔く。

「しゃーねえな、付いてきやがれ。」

「…………はあ。」

これだからにわかの猫好きは困るんだ、オレも余り変わらんけど。
などとぶつくさ言つ翔太。

特に付き合う理由も無いが、猫を渡されてしまつた以上付いていかざるを得ない茶々丸。

「あの、猫が好きなのですか？」

「犬よりはな。つか、犬は嫌いなんだ。」

間が持たない、と言う訳ではないが彼に質問してみる茶々丸。

「どうして犬が嫌いなのです？」

「…………昔、ガキのころに嫌と言つほど野犬の群れに襲われてな。
そん時から犬を見ると臨戦態勢に入りそうになつちまうんだ。」

と言つたか流石にあの時は死ぬかと思つたぜ、と半分愚痴を零す彼。
嫌と言うほど野犬に襲われる、と言う状況について彼女は推測する
がデータ不足の為不明。

「さ、ついたぜ。」

そう言つて彼が連れてきたのは教会の裏手。

彼が現れたことに気がついたのか、この夕方の時間に来る事を知つ
てゐるのか、

野良猫たちがにゃーにゃーと姿を現す。

「つたくよ、オレもしょつもない話引き継いじまつたぜ。」

などと言いつつ、「ンビ二袋（いつび）から出したのかは、茶々丸
も分からなかつた（から

猫の餌やら、皿やら牛乳やらを取り出す彼の顔は、それほど嫌そう

でもなかつた。

「あの…………」の猫達は？」「

「オレもよくわからんねえよ。バイト先の引っ越し始めた先輩から是非にと頼まれてな。

猫好きだ、なんて言わなきゃよかつたぜ。」「

そういうながら手際よく餌をせつて行き、よつてくる猫に構う彼。

「ほり、お前もぼさつとしてんじゃねーみ。手伝え手伝え。」

「その…………何をすれば宜しいのでしょうか？」「

「見りやわかんだらうが、それくじらこまよ。」

生憎、人への給仕の仕方はデータにあるが猫の面倒の見方はデータには無い。

これもハカセにインストールしてもうおひごメモリーに記憶する茶々丸。

取りあえずは見様見真似で応対する事にする。

そういうじてぐる内に、野良猫達も満腹になつて満足したのか去つていぐ。

その中にま、先ほど助けた野良猫の姿もあつた。

「ま、こんなもんだらう。」「

「…………ずっとこのような事を？」「

「オレも始めたのはつい最近だよ。さつきも書つたけどつい頼まれちまつてな。

全く、安請け合いなんてするもんじやなかつたぜ……

頭を搔きながら餌代だって馬鹿にならねーんだぞ、と呟く彼。

そんな彼に、茶々丸はおずおずと提案した。

「あの……もし宜しければ、これからもお手伝いさせて貰つて宜しいでしょ？」「

「そりやオレとしても願つたり適つたりだが……何でだ？」

連れてきておいてなんだが、アンタに手伝う理由は無いはずだぜ？」
確かに彼の言う通りだ。茶々丸に手伝う理由は存在しない。
しかし、プログラムではない「何か」がこの行為が尊い事であると
判断したのだ。

「ま、いいさ。オレも毎日来れるか自信がないしな。
アンタさえ良ければ来たら良いさ。大体あの時間なら猫ども来てる
みたいだしよ。」

「わかりました。では、餌を用意して来させます。」

それが、彼との出会い。

彼女と彼があ互いの名前を知るのは、もう少し先の事になる。

麻帆良学園女子中等部2・A・出席番号15番、桜咲刹那が彼と出
会つたのも1年の頃。

彼女には使命があった。

関西呪術協会の長・近衛詠春の娘にして、幼なじみである近衛木乃
香を極秘に護衛する事。

彼女にとつて木乃香は大事な存在であり、彼女を護る為ならその命
すら喜んで捧げるだろう。

とは言え、この麻帆良内においてはそつそつ危機的状況は発生しな
い。

麻帆良全体を覆う結界とそれに慢心しない警備陣。この地は揺りかごのような物なのだ。

しかし、それでも彼女は油断しない。

出来うる限り、影から見守る形ではあるが彼女の護衛についているのだ。

そんな彼女が、彼と出会ったのは部活動の時。ただし、自身の部活では無い。

図書館探検部。麻帆良に存在する巨大建造物・図書館島を探検する部活動であり、

護衛対象である近衛木乃香が在籍している部活動である。

図書館島内部は巨大なダンジョンと化しており、浅い層とは言えども危険は発生しうるため、

出来うる限り自身が護衛に向かうようにしてているのだ。

そこで木乃香と一緒にいたのが彼である。恐らくは同じ部員なのであろう。

正確には図書館組の3名・富崎のどか、綾瀬夕映、早乙女ハルナ - も一緒にあつたが。

一瞬何故小学生が?とも思つたが、男子中等部の制服を見て同学年と判断する。

ぱっと見はいいとこの坊ちゃんに見えるが、漏れ聞こえる口調は柄が少々悪い。

ただ、どうしかと言えば悪ぶつているイメージの方が強い。悪ガキと言つた所だらうか?

部活動の様子・つまり、図書館島内部の探索・を見る限り、彼の身体能力は高い。

クラスメイトである忍者（本人は否定するが）を彷彿とさせるぐらには。

登攀にせよバランス感覚にせよ、何をやらせても一般人の枠内では収まりそうに無い。

……もっとも、この麻帆良では『一般人』の定義が少々変わつてくるのだが。

何らかの目的でお嬢様に近づいたのか……そう彼女が考えてしまうのもしょうがない話。

そして、その日の探索も終わり図書館島から出てみれば既に夕方近く。

まだ日は落ちていないが女性だけで歩いて帰るのも危険だろう、と同行を申し出る彼。

木乃香達にしてみれば断わる理由もなく、結果として駅まで送る事になる。

当然の如く後ろから彼女も追いかける。『気づかれないよう』。

話題は他愛も無い話題のようではあるが、ふいに、彼が声を潜めた。

彼の反対側にいた高崎のどかがびくつ、と肩を震わせる。

不審に思う彼女。一体彼は何の話をしているのか。

そうこうしている内に彼は立ち止まり、木乃香たち4人だけが先へ行く。

手を振つて彼女達を見送つている彼。どのような顔をしているのかは分からぬ。

しかし、ちらつと見えた木乃香達の表情はどこか不安そうな顔でもあつた。

木乃香お嬢様を追いかけたいが、彼の動きが分からぬ。もしや足止めかと思う彼女。

その考えは間違つてはいなかつた（最も、理由は彼女の想定とは違

う訳であるが)。

木乃香たちが立ち去ったのを確認してから、彼は妙な行動を取る。人差し指を空に翳す。まるで風向きを確認するかのように。結果が思わしくなかつたのか溜息を付いた後に、彼は振り向き言葉を発した。

「そろそろ出て来いよ、ストーカー野郎。」

気づかれたのか！？

確かに自身の隠行術はそれほどではない、だがそれを陰陽術で補助しているのだ。

並大抵の腕前では気配を察知する事も困難なはず。

クラスメイトには通用しそうも無いのが2・3人いるわけだが……。

⋮。

だが、気がつかれた以上は隠れていっても意味は無い。元よりこの身はお嬢様を護る為にある。問いただすにはいい機会だと判断し、姿を見せる。

彼は少し驚いたようであった。

「何だ、女かよ……」

「……貴様、何者だ？」

彼の男女差別を髣髴とさせる暴言は聞き流し、質問をぶつける。

言外に、答えねば斬り捨てる殺氣を込めて。

同様に殺氣を込めて、彼も睨みつける。

「そりやあこっちの台詞だ。てめえ、図書館島からずつといやがつたな？」

何か行動を起こす訳でもねーから、無視してたんだが」いつもついて来られると氣味が悪い。

どうこう理由でどつづきを付け回してやがったのか、正直に吐いて貢おうじやねえか。

「わざわざ貴様に語る必要も理由も無い。」

まさか図書館島の段階から気が付いていたとは……と咄嗟の驚愕を押し殺す彼女。

「気が合つた。オレもてめえに語る気なんぞねーよ。真剣ぶら下げてるなら尚更な。」

「つー。」

今度こそ本気で彼女は驚愕する。今だ竹刀袋から出していなこの刀を見破るのか、と。

確かに、竹刀袋に入れる以外の偽装をしている訳ではない……ないのだが。

「おいおい、まさか見破られないと思つてたのか?上手に誤魔化してこいつもりだろうが、

竹刀と真剣じや重さが違いますぐるんだよ。そんな袋じや見る奴が見ればすぐわかるぜ?」

「どうやら……力尽くでも聞きたさず必要がありそうだな。」

竹刀袋から抜き出したのは長より授けられし名刀『夕凪』。

勿論、「まだ」斬り捨ててしまつ訳にも行かないでの、鞘からは出さずそのまま構える。

不審者ゲージがMAXまで上昇した以上、少々手荒になるが止むを得まい。

「やつぱり気が合つじゃねえか…………俺もそう思つてたところだ。
ストーカーどころか、辻斬り一步手前のキ印に容赦は不要、つてな。
」

「そつ言つて、ポケットから取り出した手甲を装着する彼。

身のこなしといい、装備といいクラスメイトと同じ（繰り返すが本人は否定）忍者の類。

そう類推する彼女。

明らかにポケットからポケットに収まらないサイズの物が出て来た事には驚かない。

この業界、ある意味何でもありである。

「てめえに一つ言つておく。風向きが悪かったことを後悔しな。

オレの選択肢に手加減の文字はないぜ？」

「…………その言葉、後悔するな！」

まさに、一触即発・即戦闘の空氣。

だが、殺氣が混じりあつその空間に平然と割り込む1人の姿があつた。

「二人とも、その辺にしておこつか？」

現れたのは高畠・T・タカミチ。

この麻帆良にて広域指導員として名を馳せ、『死の眼鏡』『笑う死神』と恐れられる存在。

そして、桜咲刹那のクラスの担任でもある。

「た、高畠先生！？」

「…………何だ『死の眼鏡』（デスマガネ）かよ。丁度いい、ここにストーカーがいるぜ。

早めにしょっぴこちまつてくれねーか? 「

驚く刹那。

そして翔太はさつきまでの臨戦態勢はどこへやら、渡りに船とばかりに高畠に訴え出る。

「わ、私はストーカーではっ!」

「人の後ろから部活中、いや部活前からか? 気配殺してひたひた付いて来て

ストーカージャねえなら一体何だつてんだ? スパイか? 暗殺者か?
それとも忍者かよ! ?」

「そつ、それは……」

言葉に詰まる刹那。あくまでも護衛の件は内密にする必要がある。
ましてや一般人にそれを語るわけには……。

「わりい、辻斬りだつたな。」

「貴様つ……!!」

「その辺にしておいてくれないかな? 駒井君。」

流石に辻斬り扱いされれば刹那とて腹も立つ。

そんな険悪な雰囲気になりそうな一人を取り成そうとする。

「おい、ストーカー兼辻斬り予備軍の肩持つ氣か? 広域指導員の名
が泣くぜ?」

「後、その名字で呼ぶな。」

実際、状況だけで見れば立場の悪いのは刹那である。

彼とて偶然図書館部の4人と出会い、現在の状況を聞かなければここにはいなかつたのだが。

勿論、刹那の事情を彼は心得ている。

しかし、それを裏の・この場合は魔法に関する・世界も知らない一般人に教えるわけにも行かないであろう。

彼も担任をしているクラスの生徒と同じく（べどいですが本人は否定）忍者とは言え、だ。

「とにかく、この件に関しては僕が預からせてもらうよ。

状況の説明もして貰わないといけないだろうし、二人ともちょっと来てもらおうかな。」

とにかく事態の收拾を図る為に、一人とも来てもらひ事にした高畑。

「そりや構わんが、最低でもあの真剣は没収しろや広域指導員。」

「それを言うなら、あなたのその手甲もでしょう！？」

「こいつはただの手甲だよ。てめえの真剣よりは100万倍安全だね。」

「勿論、双方武装解除した上でだよ。一人とも預からせてもらうから。」

仕方ないとばかりに差し出す刹那と翔太。

それじゃあ、行こうかと高畑は声をかけて3人は歩き出す。

……後は取り立てて語ることではない。

二人が（それぞれ別室で）高畑に事情を説明しただけの事。

そして結局、刹那が近衛木乃香の護衛をやっている事実を話せざるを得なくなつた事。

何しろ、翔太から見れば刹那が辻斬り未満のストーカーと言つ事實は動きそうにもなく、

木乃香と同じ部活動で彼が活動している以上、同じ騒ぎが起ころる
が目に見えているのである。

最も、表向きの事情（近衛木乃香の実家は名家であり、身柄を狙わ
れる可能性がある）しか
教えておらず、あくまでも内密の話であると翔太にも言い含めだし、
彼も理解はしたのだが……納得はしていない。
彼に言わせればこうである。

「護衛ねえ。アイツ、仮にオレが本当に暗殺者ならどうするつもり
だつたんだろうな？」
刀一本で陰から護衛とか……射刀術か縮地の使い手か、つつーん
だ。」

そつ言われた事を知る事無く、彼女は護衛を続ける。
近衛木乃香を護る為に。

ちなみに、隠行術の修行の為にクラスメイトの忍者（本当にくどい
ですが本人は否定）に
相談したのは超余談である。

第一巻：バイトと猫とストーカー ジャンルの巻（後書き）

> 明日菜パート

それほど話が発展しなかつたとも言ひ（おー）。

> 許婚

1話の段階でお察しされた方もいるでしょうが…………（え）。最初に言つてますよ、当作品のヒロインは楓でござります。にんにん。

> 一昨年

小学5年生時の話となりますね、翔太と楓の出会いは。多分楓はこの頃の段階で身長でかかつたはず。

> 鋼の自制心

よく考えればここにまだ中一。^{じゅういつ}

ちと色ボケすぎたかなあ？

まあ、翔太君は紳士なんだといふことで一つ宜しくお願ひします。

> ガイノイド

全員出席番号～番つてやるのもなんだかなあ、と思いまして。せつかく口ボだしいよ、ど。

次のせつちゃんは「神鳴流剣士」で行けるけど明日菜がちょっと見当たらない。

まさか「バカラッド」って書く訳にもいかないし、書いてみたけど違和感バリバリでした。

> 教会の裏手の猫のたまり場

と言つわけで、脈々と引き継がれてる場所と言つ説を立ち上げて

みた（え

よく考えるとこの教会、シスター・シャークティとかいるんじやねえの？

それとも他に教会があるのか？

へこちやんの護衛

真面目にやらせぬなら部屋も一緒にして同じ部活動にいのべきだよね、
と△

せつねやんにもプライベートとかはあるんで強くはいえませんが…
……。

と言つたか、護衛一人とか絶対無理だって△

› 彼はいかにしてこのちやんと知り合つたのか。

本の雪崩から助け出した、とか書いつと思いましたがそれだとせつ

ちゃん涙目と言つ△

むしり護衛仕事しろと言われてもしじうがないレベル。
と言つわけで純粹に同じ部活の部員です。

› 遭遇、せつちやん

書いてて気が付いた。これ楓の時と同じじゃねーか（おこ。

ちなみに武者修行中に流口に神鳴流とは遭遇しておつません。

› 偽装竹刀袋

魔法とかで誤魔化せば、とも思いますが見る人が見るとやっぱバレ
バレじゃないね？△

› 斬り捨てる

とは言え本気で呑き斬るつもりはないません、はい。

› 貴様何者

「何の目的があつてお嬢様に近づいた！」とか言つてしまふ。「ち
ゃん爆誕のお知らせ」
あのメンバー（本屋、パル、ゆえ吉、いのわせさん）で「お嬢様」つ
てイメージがしつくり
来るのは一人しかいない罷。

› 高畠さん

楓繫がりで名前くらいは聞いていました。

生徒の素行調査だのしてると、許婚の存在くらいは浮かび上がるで
しうし。

最も、その許婚相手が自分の生徒を上回るトンでも忍法使いである
までは知らないと言つ事で。

› 後は

割とあたってきたのでまとめました（おい

› 刀一本で

せつたん、一応陰陽術も使えるんですけど……知ってるわけも無く

w

第二卷・ヒカルノハヅヤのアドバイスの巻（前書き）

まさかのバレンタインネタ。一口遅れW

第三卷・とある「ンジャの一日ヤマの巻

駒井翔太の朝は早い。

新聞配達のバイトをしているので当然と言えば当然なのであるが。目覚ましを鳴る前に止めて顔を洗い、ルームメイトを起こさないよう着替えて

前の晩に用意しておいた飯を食う。そしてそつと出て行くまで20分も掛からない。

バイト先まではランニングで静かな街を駆けて行く。特に重りをつけているとかはしていない。

常に戦場を心得とする彼にとつて重しは邪魔にしかならないからだ。

そんな彼のバイト先での評価は極めていい、と言つても良い。無遅刻無欠席、大きなクレームが出たことも無く、口調に反して礼儀も知っている。

仕事場での人間関係も良好な部類と言つてもよい。

「ほら、翔太。これあげるわ。」

仕事が終わった後、神楽坂明日菜が何かを投げて寄越すのを受け取る翔太。

いかにも市販品で「ござい」と言わんばかりのラッピングがされた長方体のへらべつたい物体だ。

「…………なんだこりや？」

「なんだこりや、つて今日が何の日か知らないの？」

そう言われて思い出そうとする翔太。

しばらくして、合点が言ったのかポンッと手を叩く。

「俺の誕生日にはまだ早いぜ？」

「違うわよつ！ 今日はバレンタインでしょー？」

「…………おお。」

すっかり忘れてた、と呴いてバリバリとラッピングを破りだす。

「言つておくけど……」

「分かつてると、義理だろ義理。本命はちゃんと渡すのか？ 手作りを？」

「な、何で手作りって……？」

名探偵にズバリ言い当てられたかのじとくづいたえる神楽坂。

おっ、チョコじゃねーか。と当たり前の事を言いながらムシャムシヤと食べだす翔太。

「いやお前、そんだけ指に絆創膏張り巡らせてたら嫌でも氣がつくだろうぜ？」

頼むから隠し味に私の血液を入れたのよ、とかそういうのはやめとけよ？」

「やんないわよつ！ ……まあ、そういうのもあるって話は聞いたけど……」

後半の神楽坂の咳きは華麗にスルー。本当にやつてそうで怖い。

「せういや、バレンタインが何でバレンタインって言つか知ってるか？」

そんな翔太の問いに首を振る神楽坂。

さすがバカレッドの異名を（1・A限定で）持つ女である。

「そもそもは1945年に日本が負けたところから始まつてな。

当時の日本には物が無くてよ、沢山の子供達が毎日すきつ腹だったわけだ。

でだ、進駐軍のアメリカ軍人が美味そつにチョコレートを食つてゐるのを見てな、

拙い英語で子供達が『ぎぶみーちょこれーと』とチョコレートをねだつてたんだよ。

そんな光景を見た当時GHOで少佐やつてたジョン・バレンタインつて奴が私財を投じて

チョコレートを飢えた子供達に分け『えてた、つて美談があつてな。そいつにあやかつてチョコレート会社が仕掛けた商品戦略だよ。』

「途中まで凄い美談に聞こえたのに、いきなり身もふたも無くなつたわね。」

ジト目で神楽坂が翔太を見る。無論、堪えるわけも無く。

「じょうがねーだろ、チョコレート会社だつて売れなきゃ社員食わせられねーんだ。」

「それはそうだけど…………何にせよ、そつこつ話があつたんだ。つて、そろそろ寮に戻らないと寝る時間確保できなijijyaniつ！
それじゃあね！！」

そう言つて、駆け出していく神楽坂。

そんな彼女を見送りながら翔太は思つ。

「あいつ、マジで信じたのかよ？」ヒ。

それはさておいて、自分も一度寝と洒落込む為に帰宅する事にする。彼が生活しているのは麻帆良男子中等部男子寮である。

大きく女子寮と変わる所と言えば大浴場が無い、と黙つていらっしゃるであろうか。

そのせいで全体的に女子寮に比べて小さくなってしまうのがあるが。

出た時と同じ要領で静かに入室し、そのままベッドに入つて一度寝に入る。

田が覚めるのは朝食の匂いである。

「あ、起きた？ 一度もつすぐ」飯できるから着替えた方がいいよ？」

それを察して掛かるのは柔らかな声。

正確に言えば、女性みたいな声と言つべきなのか。

唸り声のような返事を返して着替える翔太。

食卓には既に朝食が湯気を立てて並んでおり。翔太が椅子に座るとタイミングよくお茶が置かれる。

「おはよ、しょーちゃん。」

「おう、おはようさん。」

しかしながら、と茶を啜りながら翔太は思つ。

「…………どうしたの？ 難しい顔して？」

「いやも、改めて人生の不条理に頭を悩ませてな。」

ふーん、と小首を傾げる田の前の前の彼こそルームメイトの巫女田である。所属は演劇部。

腰まである流れのような黒髪に、女だと言われても納得しそうな顔。

体つきも相まって、男装した女性だと思われる事も人々あるのである。

「（せつてーこれで男、とか嘘だろ本氣で…………）」

何でも女系家族で周りは皆女ばかり。小さい時から女の子の服を着てたとか。

何しろ初めの頃は何で女性が男子校にいるんだーと言ひ話になつたくらいである。

ついでに言えば翔太が一緒に休日出かけた所を偶然楓に見られ修羅場になり掛けた事がある。

「いや、まさか男性とは思わなかつたでござれぬ。拙者も修行が足りんぢゞざるなあ。」

と後に楓は述懐する。

「私にはしょーちゃんが何を悩んでるかは分からぬけど、話くらいなら聞けるよ？」

「いや、いい。今更歯ぶきもしようがないことだからな。」

と言って飯を食べ始める。相変わらず美味しい。

自分も自炊くらいはできるが、ここまで美味い料理となると流石に無理がある。

どちらかと言えば「食べられれば問題ない」と言つたレベルの料理なのだから。

いや、一品だけ得意料理はあるのだが……。

「やう言えば今日つてバレンタインだよね？」

「…………誰かにやるのかよ?」

思わずそう聞いてしまう翔太。苦笑する巴。

「残念だけど、私にはあげる相手がないんだよね。受け取ってくれる?」

「全力で拒否するぜ。と言つた義理でもクラスの奴にばら撒いたら狂喜乱舞しそうだぞ?」

「私には物凄い葛藤をしながらも泣きながら受け取る姿しか思い浮かばないかな?」

「それ、悔し涙とか言わねーか?」

そんなお馬鹿な事を話しつつも食事は進み、一気にシーンは学校へと移る。

「うわあ、見て見てしょーちゃん。下駄箱確認してる人いるよ?」

「…………入つてたらまずいだろう、色々とよ。」

と囁つか、そう囁つのは部活動の時なり校門の外で渡すだろうにな。

「

そんな事を言いながら自分のクラスの教室に入り、自分の席に座る翔太。

一番前の窓際であり、隣の席には巴が座る。

「よひ、お一人さんお早つむん。今日も仲睦まじいねえ?」

やつ言いながら後ろの席で朝っぱらからチョコレートを貪る巨漢……もといデブが一人。

机にはチョコレートの山がびわびわ、と置かれている。

「朝飯今食つてんのかよ。後、仲睦まじいとか言つたな。」

「ていうか、朝ごはんにお菓子は健康に悪いと思つよ?」

「朝飯じゃなくて間食だよ。」

「朝飯じゃなくて間食だよ。」

そう言いながらも食べるのを止めないのはクラスメイトで翔太達と仲の良い一人である

富戸山太司である。所属は相撲部。

「おー、まさかとは思うがそれ貰つたのかよ?」

「はははっ! 当たり前じゃないか翔つちよ。何もしなけりやただのデブだが、

相撲取りならもてるんだぜ?」

「…………よく言つよ、バレンタインセールに便乗して買い込んだんじゃないのか。」

ぼそぼそとした声で彼の隣の席から声がする。

背の高いやせ細った少年だ。一見すれば虐待で飯でも抜かれてるのかと勘違いされかねない。

「ちよつ、おまつ! 何でそんな事知つてるんだ細つちつ! 」

「…………ボクの耳に入らない話はないよ? ってね。」

「つて言うか、いたんだね…………長井クン。」

「いや、気がついてやれや。」

「…………ボクとしては、気が付ける翔太君が凄いと思つよ。」

相変わらずぼそぼそとした、それでいて聞き取りやすい声で話すのは長井細緒。

所属は新聞部。

先の二人と同様に翔太と仲が良く、この4人で一群を形成し

てると言つても良い。

「…………しかしバレンタインなんて所詮はチョコレート会社の陰謀なんだがね。」

「ははっ、細つちよ。そいつは事実かもしれないがモテナイ男の僻みにしか聞こえんぜ？」

「つて、太司クンだつてそれ自腹でしょ？」

「おうよ、食つたもんは俺の腹の中だからな。」

「誰が上手い事言えつて言つたよ、この太つちよ。」

腹を叩いて笑う太司に突つ込む翔太。

「つかよ、巴つちも翔つちもチョコの宛は確保してるんだろう？」

「当たり前だろうが。つか、バイト先でとっくに貰つてきたってばよ。もう食つたがな。」

何故か無駄に胸を張る翔太。

「けつ、本命ありの癖に義理まで貰うとはふてえ野郎だ。」

「太いのはてめえだろうがよ、この太つちよ。」

「…………まあ、それだけ翔太君の人脈が凄いってことだよ。」

「あれは人脈つて言うのか？」

首を傾げる翔太。

やたら楓のクラスと関係が深い、と言つだけの話なのではあるが。

「で、巴つちはどうなんだよ？モテるんだろ？」

「全然私なんてモテないよ。演劇部じやすつと女役だよ？
むしろ男子に期待されてるくらいで……一応義理は買い込んだけどね。」

「買い込んでんじゃねーよっ！－ てかよ、そんなに嫌ならその女らしいのをどうにかしろよ?」

思わず突つ込みを入れてしまつ翔太。

それに、何故か煤けた感じで巴が応対する。

「小さい頃に女、女つて近所の子に苛められて男らしくしてやる、つて丸坊主にした事がある。」

「…………どうなつた？」

「『尼わん』つて渾名がついたよ。」

沈黙する3人。

それに構わず巴の独白は続く。

「だから私は思つたのさ。女つて言われるくじいなら女らしくなつてやるつて。

目指せ、有栖川 つてね！－」

何故かガツツポーズを取る巴。

「…………巴君は女になりたくないのかなりたいのかどっちなんだ？ どつ思う翔太君？」

「知らねえよ、んな事。つか、俺に振るんじゃねえよ。

と言つか有栖 桜つてどこの誰だよ？」

「あれだ……バ コ ドファイタ のヒロインでな……」

「太つちよ詳しいな、おい。」

そんな感じの *まじめ* *真面目* が朝のHRまで続くのである。
そして一気に時間は飛んで放課後となる。

「うーーーっす。チヨコ貰いにきたぜー。」

「義理でよかつたらあげるえー。」

「と言つて、貰える事は大前提なんですか。」

図書館探検部部室。

ちゅうじー・A図書館組がたむろつていた所にやつてきたのは勿論翔太である。

「義理でもチヨコはチヨコだ。俺は誰の挑戦でも受け付ける。」

「受け付ける、つて楓ちゃん怒つちゃうんじゃないの？」

「いや、あいつはそんな狭量じゃねーよ…………いや、一度だけぶちきれた事があつたな。」

微妙なラブ臭がつ！などと言い出す早乙女をスルーしつつ、思い出して背筋を振るわせる翔太。

何だかんだで図書館探検部の中でもトップクラスの身体能力者が思い出すだけで恐ろしい、と思つ

思つ思い出に彼女達は興味を持つたらしい。

「一体何やつたん？」

「いや、バレンタインデーの返しにマシユマロをな…………」

「それは怒られてもしょうがないのでは？」

「何で？」

「…………『『めんなさい』』って意味だそうですー。」

一人分かつてない早乙女に、富崎がフォローを入れつつ。

「まあ、全力で土下座かまして許してもらつたんだが…………。」

正確には、土下座 + 甘味一ヶ月奢りで手を打つたのであるが。

「そう言えば翔太君、アスナに変なこと教えんかった？」

「あー、朝にバレンタインの元ネタについて一席ぶつたくらいで、特に変なことは。」

唐突な近衛の質問に答える翔太。

それに、早乙女が口を挟む。

「いやアレめっちゃ変なことだから。アスナ赤つ恥状態だったわよ。

「翔太さんは、明日の朝覚悟した方がいいかも知れませんね。」

綾瀬の言葉に頷く宮崎。

とは言え、翔太に反省の色はない。

「いや…………まさか信じた上に人に喋るとは思わなかつた。」

「あかんえー、アスナそういうの信じ易いんやからー。」

やんわりと近衛が注意するが、それほど怒つてる訳でもない。直に話題を転換させる。

「せやせや、チョコレートやけどな。皆に渡しよつたら凄い数になるやん？」

「まあ、合同だしなあ。」

「なので、じう言つのを用意させてもらいました。」

と、綾瀬が出してきたのは大きな段ボール箱に収まつたチョコレートの山…

「…………おい、まさかこれが。」

「はい。男性陣はこの箱から好きなチヨココレートを食べてください。勿論、私達も小腹が空いたら取る事になるかも知れませんが気にしないで下さい。」

「いやー、問屋まで行って買ってきたからねー。これ。」

「…………義理とかつてレベルじゃねーぞ、これ。」

唚然とする翔太。

何しろ、段ボール箱にぎりぎり入ったチヨココレートは全部チロルチヨ「だつたのだから。

部活動も無事終わり、1人帰路につく翔太。

しつかし、あいつ相変わらずストーキングしてやがるなあ、などと咳きながら。

「やはり一朝一夕では翔太殿に敵わんでござるなあ。」

「たりめーだ、じつちはベテランなんだよ。つて教えてるのはお前かこのバ楓。」

いつの間にか横を歩いている楓を横目で確認。

「いやいや、まさか剎那殿の方から『隠行術について教えて欲しい』等と

声をかけられるとは拙者としても想定外だったでござる。」

「で、受けたってか。」

「週一で手合せ込みの実戦講座でござるよ。拙者も勉強になるでござる。」

どうでござるか？翔太殿も一つ……

「遠慮しておくわ。どもあいつは好きになれん。」

「まあ、話を聞いた分ではお互に第一印象最悪と直った感じで、」
「うつからなあ。」

桜咲は桜咲で、辻斬り扱いされた事を根に持つているらしい。

「とは言えモノホンの刀持つてて、」
「うらに潜まれてみる?…どうみても辻斬りだらう。」

「まあまあ。剎那殿にも都合があるんで、」
「うそくわう。それこそ余人は語れぬようだ。」

そして、会話が途切れる。

黙つて歩く一人。

歩幅こそ違え、足並みは揃い。

「今日はバレンタインデーで、」
「ジヨン・バレンタイン少佐がな……」
「その話は数年前に聞かされたで、」
「も騙したで、」
「あー、近衛達の方から話は聞いてる。明日は俺風邪引いて休む事にするわ。」
「では、このチョコはこうで、」

そう言って楓が取り出したのは本命で、
と言わんばかりの包装がされた大きな箱。

「物凄い欲しい、と言つか凄いくれるとオレが感謝する。」
「ふむ、ではこうこう時に書つ葉があつたで、」
「勘弁してくれよ……」
「何を言つで、」
「何を言つで、」
「うそくわうか、人前で言わせないだけ拙者の慈悲があると思つで、」

はあ、と溜息をつく翔太。

過去の身から出た鎧とは言え、正直やりたくないのだ。
とは言えチョコは欲しい。好きな女からの本命だし。
だから、彼は覚悟を決めて声を出す。

「『やがふみーちゅーれーとー』」と。

第三卷・ヒカル・インジャの「ロジャー」の巻（後書き）

- › 手作り
いや、チョコで指を絆創膏まみれにするのかどうかは知りませんがw
- › 血液入り
J事務所に来るチョコなんかは全部処分するとか言う話を。と云つか、この手のファンからの食べ物は全部処分かしら。
- › 小さい時から
こいついう事やると精神歪むらしきつすな。
- 自分の性別がわからなくなるとか何とかかんとか
- › 尼
某芸能人? のエピソードより拝借(え)。
- › みんなのヒロイン有栖川さん
一応伏字でw
- 同じ先生のHロ漫画で出てきたときは思わず吹いたw
と言うか、ぐぐつたら酷い事になつてたw
同人で何書いてんだよ先生よーww
- › 1 - A図書館組
本屋、パル、ゆえ吉、Jのけやんですね。書くまでもないのではぶ
いてますが。
つこでに黙つと、本屋は基本喋らないだけです(おい)。
- › マシコマロ
「「みんなさー」」の意味だと聞いたんですが、ソースが見つからな

かつた。

第四卷・ヒカル・インジャの一口・ハナレジマセル、の巻（記書也）

バレンタインデーをする以上は、ね。

後、話の基本的な流れは3話と同じです（おこ。

それと短くてごめんなさい。

第四卷・とある「エンジヤの一日・やのへじゅわる」の巻

3月1~4日、それはホワイトデー。

「ほら、 やるよ。」

いきなりバイト仲間の翔太から小さな箱を放り投げられた神楽坂明日菜は慌てて受け取った。

いかにも市販品で「わい」と言った感じの包装紙に包まれたそれを見て首を傾げる。

「えっと、 これ何?」

「ホワイトデーの返しだよ。 こらねーなら返せ。」

ああ、 そう言えば今日はホワイトデーなんだっけと思い出す神楽坂。

「いるに決まってるじゃない。 中見ていい?」

「大したものじゃねーぞ?」

そう言う翔太の言葉を聞き終わるか終わらないかの内にバリバリと包装紙を開ける。

箱の中に入っていたのはキャンディーの詰め合せだった。

「意外と普通な物が入ってたわね……」

「お前が俺をどう思つてるか良くわかったよ。」

やや憮然とする翔太。

あははー、 と笑って誤魔化す神楽坂。

「そもそも、ホワイトデーってのはな……」

「今度は騙されないわよー！」

警戒態勢をとる神楽坂。

先月クラスでバレンタインデーの語源について話したら「それは嘘だ」と言われたので

当然と言えば当然である。ちなみにそれを言ったのは楓だったりする。

「いや、翔太殿が昔話した内容そのままでもうつたからな。無論、最初に拙者が聞いた時も

騙されてしまったの『じやるが。』

とは後に楓が語った台詞もある。

「いやいや今度は間違いなく本當だつて。そもそもホワイトデーってのはバレンタインデーの歴史を説明する所から始めなきやならないんだが…………そつちは聞いたか？」

「確かに、ヴァレンタインとか言つ人が死んだとかそんな話は聞いたけど。」

確か、バカリーダー」と綾瀬夕映がそんな事を語っていた事を思い出す神楽坂。

とは言え先月の話なのでほとんど頭から吹き飛んでるのは流石バカレッジである。

「改めてそこから話をするとな、そもそもバレンタインデーってのは兵士の自由結婚禁止政策に背いて結婚しようとした男女を救うためにヴァレンティヌス司祭が

死んでしまつた日でな。

そこから恋人達の日、つて事になつちまつたんだよ。で、その結婚しようとした男女・ホワイト夫妻つて言つんだが、改めて永遠の愛を確認した

のがその翌月の3月14日つて事で、夫妻の名前にあやかつてホワイドティーつて付いたんだよ。

そこから2月14日に『貴方の事を愛しています』と女の方から贈り物を贈つてだ、

3月14日に男の方が『僕も君の事を愛してるよ』つて贈り物を贈つて返礼とする、

と言つ行事にしたんだよ。チョコレート会社以外の製菓会社がな。「だから、何で最後にそんなオチをつけるのよ……」

額を押さえる神楽坂。

「しあうがねーだろ、バレンタインの日だからつてチョコレート売つてる会社だけ

丸儲けとか他の製菓会社が黙つていられなかつたんだからよ。」

「そりや そうだけど…………何にせよ、そんな話があつたなんて知らなかつたわ。

つて、そろそろ寮に戻らないと寝る時間確保できなijijy nai!つ！それじやあね！！」

そう言つて、駆け出していく神楽坂。

そんな彼女を見送りながら翔太は思つ。

「あいつ、また信じたのかよ！？」と。

その下駄箱で翔太は唖然としていた。

「……おー、ホワイトデーとバレンタインデーをじつちやにしてる奴が居ないか？」

「あはははは。」

ルームメイトであり、クラスメイトである巫女巴の靴箱には物が溢れかえっていた。

予め用意していた紙袋に入っていた物・ビニール袋でも菓子類だとと思うを放り込んでいく巴。

「ほら、返しだよ返し。バレンタインの時に演劇部の男子に配ったつていつたじゃない？」

「だったら部活動の時に返せってよ…………」

翔太は頭を抱えたくなつた。

そもそも、バレンタインデーで貰つたからと言ひて巴は男なのだ。いや、その前に男からバレンタインチョコを貰つて返しをするとどうのはどうなんだ？

そんな感じで悩みながらも、自分のクラスの教室に入る。

「よつ、どうしたよ翔つち？頭抱えちまつて金色の輪つかでも嵌められたか？」

「俺はどこのサルだつてんだ。巴の持つてるもん見たら分かるだろうよ。」

クッキーの缶を抱えた状態の富戸山太司はそこで巴の持つてる紙袋に気が付いた。

「おはよ、太司くん。朝からおやつは感心しないよ？」

「みつばち。世の中朝食はおやつだつて言つてゐやつもこのんだ。
気にすんな。

てか、その紙袋の中身はアレか?返しとせひ言つたか?」

正確には返された物だけどねー、と皿こながら自分の席に座る巴。
翔太も座る。

「……バレンタインかい?」

「そ、それのお返しつて奴だよ。つて長井クンいたんだ。」

「いや、だから気が付いてやれよ最初から。」

相変わらず翔太だけが気が付いていた長井細緒に返事を返しながら、
袋の中に詰めた物を改める巴。

「クッキーとかチョコレートなら食べきれ無いだらつから俺にくれ。

「いやその前にその由はじうしたんだよ太っちょ。」

「……ホワイトティーのセールで買い込んでたよ。」

「だからなんで知つてんだよ細つちつ……！」

そんな太いのとちつここのと細いのの蝶りをバックに黙々と箱を取り出して中を確認する巴。

「…………ねえ、ショーチャンビッシュ?」

「どうしたよ? いきなり心細い声だすんじゃねーよ?」

「これ、どうしたらいいと思つ……?」

やつぱり、一つの箱から取り出したのは……

「おー、太っちょお前に任せた。」

「細ひちお前に任せや。」

「……ボクに振られても困る。」

女性用の下着だつたりする。

「つけひ、つて事なのかな…………」

「全力で拒否しろと言つか、いにからとつとと應せられつーー。」

結局、下着はそのまま処分と言つ事になつたとさ。

「とづか、しょーちゃんが彼女にこれをプレゼントしあやえば…

……

「やめかつーー。」

再び場所は変わつて図書館探検部部室。

「ひこーつす。ホワイトナーの返しに來たぜー。」

そう言つて部室に入つた翔太を迎えたのは1-Aの面子であつた。
…………彼にとつては予想外の人間もいた訳だが。

「よくも騙してくれたわね…………」

そう、静かに怒りに燃える神楽坂明日菜である。

そんな彼女から離れた位置に1-A図書館探検部の面子はいるわけであり。

「あつう、暴力はダメですよー。」

「アスナー、ほどほどにしつきやー?」

「と言つよつ、一度懲りてゐるはずなのにどうしてまた騙したりしたですか。」

「でも、アレで騙されるアスナもどうかと思つけどねー。」

そんな感じで好き勝手言つている状態であった。

「つて、何で神楽坂がここにいるんだよつー?..」

「あんな、アスナがまた自爆したんよ。」

「自爆つて言つうなーー!..」

そう、クラスでの雑談でまたやらかしたのである。

当然の事ながら、博学知識豊富なバカリーダーの綾瀬、そして同じ手に昔引っかかっている

バカブルー・長瀬にとつてはそれは明らかに嘘つぱちであり。

「確かにバレンタインデーの時とは違つて真実の中に嘘を交えた訳ですから、

100%嘘と言つわけでは無いんですけど……」

そう言つて『黄金の蜂蜜ジュース』と書かれた紙パックのジュースを飲む綾瀬。

「て言つよ、明らかにホワイト夫妻つてのが怪しさ大爆発だつて
気が付けよつー!..」

「そんなの気が付く訳ないじゃないつー!..」

「いやー、流石に皆気が付いてたけど…………」

口を挟みかけて神楽坂に睨まれて口を塞ぐ早乙女。
流石に飛び火は勘弁したいらしい。

「ともかく謝つた方がええでー。」のままやと狼少年扱いにされてまつよー？」

「そりですー。あ、謝つた方がいいと思いますー。」

そんな近衛と宮崎の説得を受け入れたのか、急に身じまいを正す翔太。

「な、何よ？」

そんな彼にたじろぐ神楽坂。

「…………すまん、お前がそこまで本氣にしてるだなんて思わなかつた。だけどな、オレにひとつてはあの朝の出来事は遊びでしかなかつたん……」

「紛らわしい言い方してるんじゃないわよつーー！」

言い終わる前に、ぶん殴られた翔太だつたりする。

「本氣で反省してるんでしょうが、彼は？」
「照れ隠しなんちゃう？素直に謝れへんのやつて。」

呆れた目で見る綾瀬と好意的な方向で捉えてる近衛であった。

「おー、痛え。」

殴られた頬をさすりながら立ち上がる翔太。

「だ、大丈夫？」

殴ってしまった神楽坂も少しやりすぎたと思つてゐるらしい。

さつきまでの怒りも収まつたようではある。

「ま、これでお相子つて事で手打ちにしておけ。けど俺も悪ふざけが過ぎちまつたしな。」

「もう。これつきりなんだからね？」

元々神楽坂も根に持つタイプと言つわけではなく。

何だかんだで和解する二人。

「さて、ちとゴタゴタしちまつたがホワイトティーの返し持つてきたぜー。」

「誰のせいだ『タタタした』と思ってるんですか。」

「そいつは言つちゃいけないお約束だぜ?..」

綾瀬のツツコミを華麗に流しながら、部室の外に置いてあったダンボールを部屋に入れる。

「何よこれ?」

「いや、バレンタインの時によ。『皆に渡してたら凄い数になる』って事でダンボール単位で

チョコレートを男子勢に貰う形になつたんだよ。当然、返しも全員に返してたら凄い数になるからな。こつちもキャンディーを箱単位で用意させてもらつたぜ。」

神楽坂の疑問に答えながら、ダンボールを空ける翔太。その中にはぎつしりと様々な種類の飴が詰まつていた。

「あれ？でもホワイトティーは3倍返しじゃないのかなー？」
「……そういうと思ってたぜ。」

「にしし、と笑う早乙女に「ヤリ」と笑みを返す翔太。
そのまま再び部室の外に出るともう一箱ダンボールを持ってきたのである。

流石にその場にいた全員が唖然とする。

「えつと、それって……」
「だから『3倍返し』だよ。これで満足だろ？」
「物凄い量になつてますー。」
「3倍の意味が違うです……。」
「食べきれるやろか、これ？」
「その前に、溶ける心配した方がいいんじゃない？これ。」

そう、ダンボールの中身は尽く飴だったのだから。

「相当このダンボールは重いんですけど、2つもよく運べましたね？」
「こんなもんだろ？」
「よいしょつと……そうねえ、こんなもんじやない？」
「おー一人の力を基準に物事を考えられても困ります。」

部活動も無事終わり、1人帰路につく翔太。

しかし、大分隠行術もモノになつてきたよな、などと呟きながら。「やはり教える人間の腕前が良いからで」「ざらうつなあ。」「抜かしてろ、つて言うか洒落にならんレベルにまで持つていかれても困るぞオレが。」

いつの間にか横を歩いている楓を横田で確認する。

「いやいや、刹那殿は中々筋がいいでござる。拙者としても教えがないがあるでござるよ。」

「分かつてるとは思うがな…………」

「無論、全てを教えるつもござりませんよ。やつら邊は弁えてるでござる。」

「で、アイツと戦つてみてどうよ?」

「軽い手合わせ程度でござるが、相当の使い手である事は間違いないでござる。」

翔太殿も油断してると足元を掬われるでござるよ?」

「…………精々気をつけるぞ。」

そして、会話が途切れる。

黙つて歩く一人。

歩幅こそ違え、足並みは揃い。

「今日はホワイトデーでござるよ?」

「そもそも、ホワイトデーと言つのはな…………」

「その話も數年前に聞かされたでござる。つこでに言えればまたアスナ殿も騙したでござるつ?」

「少し前にぶん殴られてきた。」

「全く、少しばは自重するでござるよ。」

「…………氣をつけるぞ。」

そして、再び途切れる会話。
足音だけが道に響く。

「で、ホワイトデーだけよ…………」

「拙者からリクエストをするなら、翔太殿の

「ストップ。年頃の女が何喋らうとしてやがる」のバ楓。

「ホワイトナーにちなんだ物品を所望しようとしてるだけだ『じざる』よ」

にんにん、と誤魔化そうとする楓。

溜息を付く翔太。

「あんな、一応俺達まだ中学生な?」

「しかし既に拙者と翔太は婚約者で『じざる』よ~何も問題はないでござるよ。」

「親御さんからも『くれぐれもよろしく頼む』って言われてるんだよオレはっ!」

「父母からは『孫の顔はまだか』と催促が矢継ぎ早で『じざる』。」

「……マジで?」

「嘘で『じざる』。」

ぐつ、と拳を握る翔太。だがその拳が唸りを上げる事はなかつた。そつと密着するように楓が身を寄せてきたからだ。

「ならせめて、一緒に寝て欲しいで『じざる』よ。

それくらいなら構わないで『じざる』よ~」

「……しゃーねえな。次の山修行の日でいいか?」

「無論。それでは拙者楽しみにしてるで『じざる』よ。」

では御免、と姿を消す楓。

「早またかな……オレ。」と呴いて翔太も帰路につくのであった。

後日。

山の修行場のアリバウンド風呂。

「…………早めつた。」

「こや、本当に我慢できなかつたんだ」「わるなあ。」

「るせえよ。始めからこつが田的だつたなつ……。」「嫌だつたで、じかんか……？」

「…………なわあやねーよ。」「いつのまもひかよつと場所とか状況をだな。」

「と、ぬいぐるみがやんと準備して來てる辺り予感はあつたんでござれりハッ！」

「…………」「るせえ、オレはもう上がるーつて抱え込むな抱きしめるんじやねえつー。」

「胸が、胸が当たつてゐつてよー。」

「心配無用、当てるるだ」「わるな。」

「わつとも無用じやねーよつー。」

終われ。

第四卷・あるいはジャの一日・やのへじゅわる、の巻（後書き）

ついにやつねまつた気がする昨日いかがお過いしでしょつか（え。
小学生だってやつてる世の中だし別にいいよねー！
ちゃんと対策は取つてるから大丈夫だよきっとーー。（そうか？）
まあ、非難多こよつなら削除する次第。

第五巻・裏との遭遇と不本意な結果で「やれり」の巻（前書き）

年代ジャンプ！

と言つても2年に上がつただけですが。

第五巻・裏との遭遇と不本意な結果でござる、の巻

4月15日。

麻帆良学園都市のメンテナンスの為、学園自体が停電し闇に閉ざされる日。

それは、この麻帆良を守る魔法先生・魔法生徒達にとつて大変忙しくなる日でもあった。

関東魔法協会の総本山とも言えるこの場所を様々な理由・魔法使いへの恨みを持つ者、

図書館島の貴重な蔵書を奪おうとする者、重要な人物を攫おうとする者・にて狙つてくる輩を

撃退すると言つ重要な仕事があるので。

無論、敵対勢力からこの麻帆良を守ると言つ事はこの日だけの物ではない。

しかし、恒常に展開されている結界が停電によりダウンしている今こそがチャンス、
と攻め入る曲者の数は加速度的に増加するのである。

その結果、防衛側は毎回過労寸前まで働かれる事になる。

一つの大きな街に、僅か4時間だけとは言え蟻の子一匹入れさせないといふ

防衛網を敷こうと言うのだ。

結界が当てにならない以上、人を頼るしかない。

そんな戦域の一角で鬼の群れと戦う者が1人。
後方に控える敵方の陰陽師と思しき人影を視線に捉え、襲い掛かる鬼を斬り伏せあるいは

魔法を撃ち放ち送還する。

風に舞い散る・川に流れる木の葉のような動きで鬼達の一撃をかわしながら。

その両手に持つのは扇。武器であり魔法発動体である一家に伝わる一品。

その姿は巫女服と呼ばれる衣装であり、これもまた一家に伝わる一品である。

腰まである長い黒髪を棚引かせながら、『巫女』は舞う。

『巫女』にとつては「神楽舞」と呼ばれる舞こそが戦いであり、詠唱もある。

ある意味西と東、呪術と魔法の融合体と言つても過言ではない。

しかし、そんな『巫女』も限界が近づきつつあった。

この戦い方の欠点……その戦闘方法の都合上、長期戦には向かないのだ。

正確に言えば、体力の消費が半端無いのである。

防衛網の穴を突く形で侵入しようとしてきたこの陰陽師達を迎撃する為に手の空いていた

『巫女』が動いたのであるが……

「（二つ目の増援、まだなの？…？）」

本来ならば2人1組、3人1組を原則として動くのが麻帆良防衛部隊である。

相方の魔法生徒は合流前の段階で負傷により一時離脱、やむなく一人で来たのだ。

一人だからと言って、侵入者をそのままにする訳にも行かない訳で。そして、実際に戦つてみれば、式神と召喚した鬼の混合による数で

押す一手。

魔力にも限界がある以上、どこかで力尽きるだらうがその前にこち
らが力尽きそうだ。

そう考えた瞬間、鬼の金棒の一撃が『巫女』を吹き飛ばす。
魔法障壁と服に仕込んだ呪符、それに服 자체に込められた加護によ
りそれほど致命的な
一撃を貰つた訳ではないが、今の一撃は自身のリズムを狂わせるの
には十分であつた。

「神楽舞」の行使は舞を以つて行われる以上、どれだけ舞に没入で
きるかも重要になる。

言つてしまえば集中力と流れ・リズム・である。

それが乱れてしまつた以上「神楽舞」は不完全なものとなり、再び
完成へ持つていくには
体力が持たない。それ以前に時間が許しはしないだらう。

そう、まさに目の前に再び一撃を加えんと金棒を振り下ろす鬼の姿
があつたのだから。

もはやこれまでかと覚悟を決めたその瞬間。
その鬼の眉間に手裏剣が突き立つた。

「え？」と思う間もなく、煙玉が投げ込まれ辺りは煙に包まれる。
一体何が起こつたのかと慌てふためく陰陽師と、動搖するも警戒す
る鬼達。

「やれやれ、人様眠らせとどつか行つてると思つたら何やつてんだ
？しかもそんな格好で。」「えつ？ な、何でつ！？」

いつの間にか隣に立つてるのは『巫女』・魔法生徒である巫女巴のクラスメイトでありルームメイトである駒井翔太であった。

「いやそりや巴よっ流石に停電の度に眠り薬盛られたら不審に思つてばよ。」

そう、停電時は外出禁止の為、ルームメイトを誤魔化す為には眠らせるしかなかつたのだ。

そのために夕食にこいつそり眠り薬を混ぜておいたのだが……。

「ひょっとして、バレてた？」

「んにゃ、一回田は分からんかつたけどな。流石にあの眠気の来かたはないな、と思つてな。

2回田で確信持つて、3回田でこの通りつて奴だ。」

2回田の段階で巴の跡をつけても良かつたのではあるのだが、特に関わる事ではないかな、と放置していたのである。

「じゃ、じゃあ何で今田は……？」

「なんつづーかなあ…………虫の知らせ？」

頭を搔きながら答える翔太。

実際そりとじか言いよつが無いのだからじょつがない。

「兄ちやんと姉ちゃん、そろそろええか？」

「つまつ、鬼が喋つたつー？」

煙が晴れ始め、じぢらを取り囲んだ鬼の一体が話し掛けってきたのを

驚く翔太。

「まあ、式神ならまだしも召喚された鬼ならそりや喋るよ。」「そんなもんかよ…………しかし、本氣で実在するとは思わなかつたぜ。」

「」と笑う翔太。

「それはええけどや。坊ちゃん一人助けに来てどないかなる思ひでるのか？」

鬼の言う事も最もである。
数だけで言うならば、今だにちらに分はある状況。

ましてや、助けに入つてきた人間は裏側に詳しくは無いと推察できる。

下手すればただの足手まといにしかならない、と言つ奴だ。

「お前らの間違いは3つだ。

「1つ、どうにかなる所かお前らはすでに死んでる。」

ざわめく鬼達。

「2つ、俺は坊ちゃんと言われる歳じゃねえ。これでも14歳だつ！」

「ガキに違ひはないやうがつー」と血氣盛んな別の鬼が突っかけてくれる。

「3つ、」こつは女じやなくて男だぜ？」「

それよりも早く翔太が両手の指を動かした次の瞬間、取り囲んでいた鬼達が切断された。

「ぜ、全滅だとう！」と驚愕してゐる陰陽師。

「〔忍法・風斬〕。俺の刃は敵味方の区別無く容赦なく切り刻むぜ？」

とは言つてゐるが、その実は煙玉を呑き込んだ時にそつと鬼達に鋭利なワイヤーを

巻きつけて置き、それを引っ張つただけである。

敵に気づかれずにワイヤーを巻きつけ尚且つ引っ張るだけで切断するその手練こそ

恐るべしと言つた所なのではあるが。

我に返つた陰陽師が逃げ出すの一足飛びで追いつき、組み伏せる。

「で、ここにつぶすよ~、やつちまつのか？」

「駄目駄目っ！」

手元から黒く細い刃を持つ短剣を抜き出しながらそう聞く翔太を慌てて止める巴。

何だそーか、と首筋に柄で一撃。氣を失う陰陽師。

「いやよかつた、流石には殺したくなあ。」

「思いつきり殺す氣満々だつたように見えるけど……」

ほつとしながらもジト目で翔太を見る巴。

少なくとも、短剣を抜き出したときの彼は本気だつたと確信している。

「必要ならやるナビな。とは言えやらないに越した事はねーよ。」

そう言いながら、陰陽師の関節を外していく翔太。
それを見て慌てる田。

「ちよ、ちよっと何やってんのさ?」

「いや……ロープ持つてねーし。田を覚まして暴れられても困る
だろ?」

ま、こんなもんだろと手足の関節を外し終わった後。

「…………で、何で巫女服なんだよよりにもよつて。」

「しょ、しょうがないじゃない…………」これが戦闘服なんだから。」

顔を赤くする田。いつも時はいつもこの格好とは言え恥ずかしい
時は恥ずかしいらし。

そんな彼を見て「と言つか、似合にすがだらつ…………」と呟く翔太
がいたりする。

「しかし、まさか鬼が実在するとはなあ。」

「しょーちゃん、その事なんだけど…………」

ん?と振り向く翔太に扇を突きつけようとする田。
それよりも早く巴の手首を取り、ねじり上げる翔太。

「…………どうにづつもりだよー?」

「一応、いわち側を知っちゃった堅気さんは記憶を消すのが規則な
んだ。」

できれば抵抗せずに記憶を消させてもうえると嬉しいんだけどな……

……

ねじり上げられてる痛みを堪えながら翔太に告げる巴。

それを聞いて翔太は不機嫌になる

「オレが誰彼構わず話す奴に見えるか？ どちらにしろ信用されないだろうさ。」

「それでも、念には念を入れてつて奴だよ……隠匿は大事だつてね。」

巴の言つている事は事実である。

例外を作る事になれば、そこからなし崩しに決まりは有名無実な物となつてしまふ。

それを巴は危惧しているのだ。

「折角助けたつてのにっ！！」

「それとこれとは話が別だよっ！！」

ねじられた手を振りほどき、巴は間を取り直す。

扇は片方しかないがそれで十分、距離は彼にとつて一足はあるが魔法障壁を打ち破る手段

までは恐らく存在し無いだろうと判断。

とは言え、彼曰くの『忍術』がどんなものか分からぬ以上は迂闊に攻められず。

無論、攻撃魔法をぶつ放す訳にはいかないので『戒めの矢』か『眠りの霧』になるだろうが。

とにかく相手を拘束して記憶を消してしまう必要がある。

例え友人とは言え、だ。

翔太としてはこの一戦は不本意である。

何が悲しくてクラスメイトでありルームメイトである彼とこんな事

をしないとならんのか。

とは言え、記憶を消されるというのは真っ平御免という話であり。介入するまでの戦いを見ていたわけではないが、少なくとも防御力だけはあると判断。

あの質量の金棒を喰らって重傷になつていながらその証拠。とは言え、相手が何をしてくるかは全くの未知数。

静まり返った戦場跡でにらみ合つ事数分。

静寂を破つたのは一発の銃声と、それを弾く刃の音。

そして、状況は再び動き出す。

スナイパー・龍宮真名は驚きを隠せないでいた。

救援要請があつたポイントに相方である桜咲と到着したのがついさつき。

魔法生徒が何者かと交戦している・今は睨みあつてているだけだが - のを確認したのが少し前。

そして支援するべく桜咲が動き出し、自分が発砲したのが今しがたである。

本来ならばこの一弾で相手は倒れ、状況は終了していたはずだ。ところが実際はどうだ。いつの間にか抜き出した刀・忍者刀と呼ばれる部類の物だ - に

銃弾は切り払われていたのだ。

神鳴流の使い手か?とも思つたがあのよつと黒ずくめと武器で剣士、と言つてでも無いだろう。

何故かクラスメイトの1人が脳裏に浮かぶ。主に忍者の意味で。

そこに瞬動を以つて斬りかかる桜咲。それも身軽な動きでかわされる。

そもそも黒ずくめのサイズが小さいのだ。丁度クラスメイトの双子と同じか小さいくらい。

何かが引っかかって、恐らく氣のせいだろう。

それに、余計なことを考えてる場合ではない。

次弾装填。

隙あらば撃ちこむ為に、戦闘の流れを注視する。

刀と刀のぶつかり合いになるか……と思つたがそういう風にも見えない。

一方的に刹那が斬りかかるのを避け、捌いているのが実体である。しかも、こちらからの狙撃を警戒しているのか桜咲を遮蔽物にする形で。

互いに間合いを取れば発砲のチャンスもあるのだろうが、それも見られない。

刀で相手するにはやや不利な間合いを離れずにいるという感じだ。

魔法生徒の方は桜咲の支援に動く訳ではなく、むしろ一人を止めようとしている感がある。

……実は侵入者ではない、と言つ事なのだろうか？

とは言え、こちらで勝手に判断をする訳にもいくまい。

連絡を取れればいいのだが、念話の類は行使できずまたその手のアイテムを使うには

今の狙撃姿勢からでは不可能である。

結局の所、侵入者であろうと無かるひとつ一発叩き込むしかないわけだ。

まあ、桜咲が問答無用で斬りかかっている辺りを見れば侵入者なのだろうが……。

そういうしていると、徐に黒ズくめが間合いを取る。同時に辺りを覆い尽くす白い煙。

目くらましか、と思いながらも彼女の『魔眼』はその程度では誤魔化せない。

森に木靈する銃声は3度。

無力化させる為に手足を狙つた3発のうちの1発に手じたえを感じる。

しかし、無力化にまでは至らなかつたらしくそのまま『配』こと姿を消した事を確認する。

『魔眼』ですら捉えきれないとは、と感嘆する。

撤退したと見せかけて……と言ひ可能性を考慮して、警戒すること数分。

この場にはいないと確信して警戒を解き、なにやらざやいざやいやつてる一人に近寄る。

「アンノウンは去つたようだが、何を揉めてるんだ？」

そう聞いた龍宮が二人の意見を総合するとこつなる。

- 1・彼は私のクラスメイトで不審者じゃない（巫女）
- 2・あれだけの腕前で尚且つ抵抗するなら不審者だろう（桜咲）
- 3・誰だつていきなり問答無用で斬りかかるたら抵抗しますつて（巫女）
- 4・不審者じゃないなら抵抗せず大人しく縄に付けばいいだけの話（桜咲）
- 5・話も聞かずに切りかかったのは桜咲さんじゃないですか（巫女）

「つまり……助けに来てもらつた堅気のクラスメイトの記憶を消そうとして

膠着状態に陥つた所で、私達がクラスメイトを侵入者と勘違いした

とこう事か？」「

再びぎやこぎやい始めそつな二人を抑える様に龍宮が確認する。

「例え侵入者じゃなくてもあれだけの事ができて堅気な訳が無いだろう！」

やはり西の刺客か何かでは…………！」

「だから何でもかんでも刺客にするのは止めましょよ！私のクラスメイトなんですよ！！！」

「クラスメイトだらうが何だらうがお嬢様に仇名す可能性がある以上は見過ごせないと

言つてるんだ私は！！」

「…………いいから一人ともちよつと落ち着け。深呼吸だ。」

いつから私は仲介役になつたんだ、と溜息を付きながら龍宮は考える。

確かにあれだけの戦闘力を見せられて「堅気です」とは弁解できないうだらう。

とは言え、自分のクラスメイトにも常人を突破した戦闘力がありながら「裏」については

全く知らない人間がいるわけで……

まさか、桜咲の奴自分のクラスメイト全體を潜在的な脅威と捉えているんじや無いだらうな、

いやまあボディガードとしては間違つとはいひだらうが、と思いつつ。

「とにかく、今は巫女君のクラスメイトを探す…………いや、後日接触する事が先決だらう。

最終的な判断はこれから学園長に仰ぎに行く必要があるだらうけど

ね。」

「今から追いかけないのか？」
「明らかに忍者忍者した人間を夜間に無事に見つけ出せるとは思えないね、私は。」

下手をすればトラップに引っかかるて酷い目に遭いかねー。
その手のトラップの設置・解除はお手の物だが勝負をする気は無い。
その辺は桜咲も分かったのか「それもそうだな。」と納得する。

「とにかく状況は終了した。報告の為に戻る事に……どうした？」

龍宮に話を振られ、暗い顔の巫女が答える。

「必要だつたとは言え、こいつなつたらどんな顔してしょーちゃんに会えばいいのかな、って。」

しょーちゃん、こと駒井翔太は樹の上で目を覚ます。
太陽はすでに昇りきり、大体昼くらいだろうか。
腹も減つたのでどこかで食料を調達する必要があるだらう。

あの後、追つ手が来ても大丈夫なように偽装工作と罠を仕掛けつつ後退し、

落ち着いた辺りで傷の手当・肩に一発貰つていた・を行い寝たのが朝日が昇る少し前。

バイト先無断欠勤やつちまつたなあ、と溜息を付く。
と言つたが、この一件が解決しない限りは学校も無断欠席の訳で……
溜息しか出ない。

楓とも会えない訳で……大きく溜息を付く。

そもそも、何をもつてして「この一件が解決」と言うのか。

大人しく自身が記憶を消されれば解決、だろうがそれは御免だ。

何故自分の記憶を他人に無理やり弄られないとなならないのか。

無論、自身がそれを望むのならまだしも、だ。

敵は少なくとも3名、一発喰らわされたスナイパーと人斬リスト一
カ一、そしてルームメイト。

……溜息を付ぐ。

何が悲しくてあいつとこんな事しないとならんのか。

そして、やっぱり人斬りは人斬りだったか、と。

当然の事ながら、あちらの戦力はこれだけではあるまい。

どういう目的で何をやっているのかは不明と言つより情報不足だが、
その前に交戦した鬼の事、

そして人斬りの「やはり貴様西の刺客か！」と言つ発言を繋げれば
何となくはわかる。

恐らく、常人には計り知れない領域で東と西は戦争状態にあり、そ
の余波がこの麻帆良にも

影響しているのだろう。しかし、いつ西日本と東日本は戦争を始めたのか？

やはり、西日本は大阪を首都にして「オオサカベン」が公用語にな
るのだろうか？

戦争と言つよりはヤクザの出入り、と言つ氣もしないでもないが。

まあ、あれも戦争と言えば戦争だし大差無いだろう。

ほどぼりが冷めるまで、と言いたい所だが当事者の1人が友人の段
階でそれも無理。

やべえ、オレ完璧に詰んだんじやねーの？と溜息を付く。

とは言えここでノコノコ出て行くわけにも行かない訳で……溜息

が止まらない。

ともかく、腹も減ったし何か適当に調達するか。
そう考えた翔太は動き出す。

長瀬楓は憂鬱であった。

婚約者である駒井翔太との連絡が途絶えて約一週間。

彼のバイト仲間である神楽坂に聞いた所「え？ 風邪を拗らせて休み
つて聞いてるけど？」と

言つ答えが帰ってきたがそんな話は自分は聞いていない。

クラスメイトでありルームメイトである巫女巴を捕まえて聞こいつと
も思ったが、向こうから

避けているのか捕まえられず。別のクラスメイトに聞いてみたがやはり風邪だと言つ。

どこから聞いたのか、と訪ねればルームメイトからだと。

あからさまに怪しい。

怪しいと言えば、自身のクラスメイトの龍宮と桜咲もある。

特に桜咲はやつてた実戦講座の方もキャンセルし、何と言つか敵対的対応一步手前の様相。

龍宮の方も何か聞きたそいでどう聞いたものか、と言つ顔をしていることがある。

実際の所は和解（と言うか話し合）に向けて動き出したい学園側
が彼に気を使って工作を行っているのと、楓とどう話をしていいか分からず巴、楓に話を持つていきたいが彼女が

どここまで知っているか分からぬ以上は迂闊に話を持つて行けない

+ 聞けない桜咲と龍宮、

と言つ事情があるのだが、そんな事を楓が知るよしも無く。

どひした物かと悩んでいれば他のクラスメイト・特に鳴滝姉妹・に心配される始末。

手がかりも無い以上、地道に足を使って探すしかないと言つ結論に達したのがつい先ほど。

幸いにして明日は日曜日であり、探す時間はそれなりに確保できる。まずは山からで「やるなどいつもの修行場所へと足を運んで。

「よつ、久々だな。」

と飯を炊いている翔太を見つけて思わず「何をやつてゐで」「やるかっ！」と飛び蹴りを

叩き込んだ彼女を責める訳にもいかないだろう。

「本当に心配したんじざるよ…………」

「わいい、迷惑をかけるわけにも行かなかつたからな…………。」

感動の再会から十数分後。

食事を取りながら二人は話し合っていた。

楓の目が若干赤かつたり、翔太の頬が赤くなつたりするのは恐らく氣のせいであろう。

「で、一体全体何がどうなつてゐで」「やるか？」

「それなんだがな…………」

喋ろうとした所で一人同時に同じ一点を見る。

楓がやって来た道だ。

「…………すまん代りやる。」

「全く、お前らしくないぜ？…………いや、オレのせいだな。」

最も、つけられる事自体が楓にとつては予想外だつたともいえる。
どちらにせよ、本調子でもなかつた訳だが。

沈黙。

木々のざわめく音。

いつまでその静かな世界は続いたのだろうか。

それは、翔太の一言で破られる。

「いいから出て来いよ。とつぶに分かつてんんだからよ。」

「…………やれやれ、気配を殺すのも必須科目なんだけどね。」

そう言って出てきたのは龍宮であった。

両手は上に。ついでに言えば片手には白旗代わりの白いハンカチを持っています。

「あくまで私に戦つ氣は無いよ？ 正確には話し合つて応じてもういたいんだけどね？」

全く、何で私がこんな事をとぼやく龍宮を横目に忍者っぽな気配を探る。

少なくともこの辺りに潜んでいる様子はない、と確信する一人。

「で、誰と何を話すんだ？」

「君が停電の日に見た事聞いた事について、学園長とだ。」

学園長？ 何故に学園長が出張るのか？

『麻帆良学園都市』とは言え行政を行つてゐるのは市長であり、市役所だ。

それともあの戦いは学園闘争だったといつのか？
どちらにしろ、拒否権はないに等しい。

学園長が出てくると言つた事は、最悪この学園全体が敵に回る。

「言つておくが、楓は…………」

「本来なら、楓が去つた後で接触するつもりだつたんだけどね。こうなつたら一人も一人も同じだつた。一緒に来てもうひとつになると思うが…………」

「無論で！」

「…………おい。」

龍宮の発言に「冗談じゃない」といかけた所に楓の台詞である。翔太としては何が起つるか分からぬ事態に彼女を巻き込みたくない。

「何、ここまで来れば一蓮托生と言つやつていいだるよ。

それに、翔太殿と一緒にならばどこへでも行けるで！」

「すまねえ…………」

もはや謝るしかない。

愛してゐる女を護るどころか、危険に晒さうとしているのだから。

そして、結論から言えば、話し合ひは實に穩當に終了した。
睨み合いになることも無ければ、一触即発の空気になることも無く。
内容的には魔法・魔法使いの存在、麻帆良と関東魔法協会、魔法先生に魔法生徒、

敵対勢力の存在etc……の所謂「裏側」についてのお話。

それを踏まえてウチで働くかないか、と言ひ勧誘。

「堅気が関わつたら記憶を消すつて巴が言つてたけどよ?」

「何、関係者になつてしまえば記憶を消す必要も無いじゃろ?」

などと言ひやり取りも挟みつつ。

無論、それだけの戦闘力を持つてゐるからこそその勧誘である訳だが。その辺は翔太も理解している。

「で、オレは……オレ達はその『魔法生徒』とやらになんのか?」「どちらかと言えば傭兵的扱いになるのかのう。龍宮君がそうなんじゃが。」

そうなの?と言ひ感じで部屋にいた龍宮に眼を向ける翔太と楓。頷く龍宮。

「ま、払うものさえ払つて貰えればどんな依頼でも受けるけどね。」

「これも依頼かよ?」

「当然じゃないか。」

だつたら微妙に失敗じゃないのかと翔太は思つたが口には出さない。恐らく連れてくるのは自分一人で、楓は人数外だつたのだから。

「オレはそれでも構わないけどよ……」

「ここまで来て拙者を置いていくのは逆に失礼とは思わんでござるか?」

今だ踏ん切りのつかない様子の翔太。

楓もその気持ちは分かるのだが、ここまで聞いて知らない振りをする訳にもいくまい。

「オレは楓に怪我とかして欲しくねーんだよ。」

「拙者とて翔太殿に怪我なんかして欲しくないでござる。それに、このような思いをするのは

もつ沢山ござるからな。何と言われよつとも一緒にござる。」

決意の固い楓の表情を見て、翔太は説得を諦めた。あの顔をした彼女の意見を翻すのは不可能に近い。溜息を一つついて学園長の方を向き直り。

「つーわけだ。」

「ふむ、では細かい話を詰める事にじょうつかの。」

そして話し合いも終わり、面通しやらは後田となつて解散となる。魔法使いや魔法についての詳しい話はルームメイトに聞けばいい、と言われ。

「……オレ、あいつにどんな顔して会えばいいんだ?」

と頭を抱える翔太がいたのはお約束。

最も、双方ごめんなさいの謝罪で（割と）あつさつと話がついたのだが。

何はともあれ、翔太の苦難はこれからである。

何しろ、1週間休んだ分の授業に追いつく為の勉強をしなきゃならなかつたのだから。

おまけ。

学園長室からの帰り。

「やついや怪我と書いてたが、実はあん時肩に一発貰つてな……」

「ああ、私の一発だね。……3発撃つて1発しか当たらないとは、と思つたものや。」

「どうやって避けたんだい？」

「……殺氣だよ。後、『愁傷様』」

微妙に距離を離す翔太をいぶかしむ龍宮。その疑問はすぐに解けることになる。

肩をガシッと掴んだ楓の存在にて。

「真名殿、少し拙者とお話をする必要があるようだ『ざるな』……」「……私には全くその必要性は感じられないんだがね。」

冷や汗を流しながら何とか逃れようとする龍宮。
しかし、にげられなかつた！

「何、それほど長い時間でまだやつて。と言つわけで翔太殿は先に行つて欲しいでござる。」

「あー、ほどほどになー。」

4人の楓にドナドナされていく龍宮を思わず敬礼で見送つてしまつ
翔太であった。

第五巻・裏との遭遇と不本意な結果で「やれり」の巻（後書き）

後半がちょっとダイジェスト気味になってしまった（汗）。あまりだらだら交渉風景やつてもしちゃうがないな、と。

何かせつちゃんが劣化してる上に扱いが悪い…………「めん。後、なぜか待遇のいいたつみー w

> 襲撃

1・よく関西の面子が「東許さん！」とか「木乃香ゲットだぜ！」と言わんばかりの勢いで

麻帆良に来襲してきますが、西は攻められないんだろうか？ w 東のはねっかえりが逆に力チコミに來ても驚かないんですが w w w それとも関西呪術協会なんて落ち目なんだよと思われてるのか。単純に「西の総本山の結界マジパネエ、これ無理ですよ。」の可能性もありますけど。

まあ、二次創作設定と呼ばれる部類のもんなんで突っ込むだけ野暮ですが w

2・突発的アクシデントで停電したのならまだしも、毎年2回発生する停電なんだから

麻帆良側も対策取れって話ですよね w エヴァンジェリン封印結界は自家発電か何かで賄つてるみたいなんだしさ。

……それとも、最低限の結界は展開できるよつとしてるんだらつか？ しかし、エヴァの魔力を封印できるだけの結界が停電時でも展開できるなら、麻帆良を守る

だけの結界も何とかなりそうな気はするんですよね、実際。

何かネギ魔の方かどつかでも同じ事書いた気がする。

♪ 眠り薬

魔法で眠らせてもいいんですがね、バレるとオゴジヨだから

♪ 坊ちゃん

14歳は十分「坊ちゃん」と言ひます。

♪ 風斬

そつと巻きつけるくらいならいで始末しちまえよ、ヒツヒツヒツヒツ ロ
ミはなしで

と言つが、あの手の糸やワイヤーを巻きつけて云々って技はビリや
つて巻きつけてるんだろう?

魔法使いとかなら糸に何らかの力をまとわせて動かして、でいい
と思つんだけど。

♪ たつみー

対魔物用と対人用を切り替えるわけにはいかないんで、どんな弾使
つてるんでしょう? (え

祝福儀礼が施されたゴム弾とか使つてるんだろうか?まさか。
それとも、麻醉弾用いてるのか.....いやいや、それじゃ人以外が
倒せん。

それともサーチアンドテスロイなのか、麻帆良防衛網。
これを考へるまで俺はてっきり「倒しはするが殺さない」だと思つ
てたんですが何故か

ライフル弾喰らつたらショック死くらいしそうな気はするけど
いやまあ、口径とか弾種にもよるでしょうけども。

どからはじめての一次（「」）

➢潜在的脅威

少なくともエヴァンジーリンさんは本気で脅威だから困る（武力的な意味で）。

実際の所「お嬢様を守りに来たら、賞金首にもなつた真祖がクラスメイトにいるで」「わざと

とか割とテンパつてもいい展開だと思つ

むしり、学園長に殴りこみかけてても驚かない

➢どんな顔して

たつみー「笑えばいいんじゃないか……悪かった、詠唱するのは止めてくれ」（おこ

➢十数分後

何があつたかは想像にお任せします（え
いや別にエロイことがあつたわけではないんですけど）

➢学園都市と行政

あくまでも学園都市は「研究、学術が産業や文化で大きな役割を果たしていると目される都市」

（みWikisさんによる、学術都市の解説ですが似たようなもんです）であつて、行政自体は

自治体が運営してるはずなんですよね。そのレベルで魔法使いが浸透してるんでしょうけど。

➢関係者になつてしまえば

学園長がこんなんだからネギのことがあんな事になるんだよー（待て

> 魔法生徒

二人とも忍者なので（おい。

第六巻・強襲、子供先生でいるの巻。（前書き）

そういう年代ジャンプは続く！

原作時間まで進めたかった、反省はしない。

第六巻・強襲、子供先生でいるれるの巻

「あつとこう間に2月でいるれるなあ。」

「もう2年も終わりだからな。時が経つのもはえーよ。」

スターブックスのオープンカフェでくつちやべってる男女が一組。傍目から見れば姉弟か、親戚の子を連れて歩いている女子高校生に見えるだろう。

無論、そんなわけは無く。

甲賀中忍・長瀬楓とその婚約者にして我流忍者・駒井翔太の一人である。

「学園祭も盛況だつたでござるしなあ。」

「もー一度とお前のクラスにやいかねーからな。」

「何故でいるれるかつー!?」

テーブルに突つ伏すように語る翔太に抗議する楓。

「だつてよー、お前らのクラスのテンションぜつてーおかしいだろー。」

女子中学生の合体パワーを舐めてたと言つか……

「あー、まあ、それに関してはお氣の毒でいるれる…………。」

溶けそうな口調と虚うな眼をする翔太に、目を伏せて遺憾の意を述べる楓。

「と詰つとかおめーのせいだらつーのバ楓つー!」

と吠えるように翔太が言つのも無理は無い。

元はと言えば楓が「彼が拙者の婚約者で」『じわる』などと紹介したのが問題であった。

しん、と静まり返る教室。そして「ええー！」と言つ大音量の驚愕。無論知つている人間もいたのだが、それでも知らない人間の方が圧倒的だつたといつてよい。

楓自身もそれほど吹聴する趣味も無かつた訳であるし。

「は、初めて知つたです。」

「圧倒的なラブ臭の発生の理由はここにあつたなんて……！」

何しろ図書館探検部でも知らなかつたわけであつて。

「アスナは知つてたんやなー。」

「ちょっとバイトの時にそういう話になつてね。」

そういう意味では神楽坂明日菜は貴重な知つてている人間であつたりする。

「なるほどね……それなら納得できる。」

とある田の『お話』を思い出して身震いをしてしまつた某巫女スナイパーがいたり。

最も、そこからが修羅場だつたのだが。

「是非インタビューを、と言つた拒否権は無いからー」と某報道部パパラッチが突撃したり、

「楓姉どうして黙つてたですかー」「ひどいです」と某双子姉妹が暴れたり、

「そうですか、長瀬さんの……残念ですわね」と某委員長が残念そうな顔をしたと思つたら

「いや、翔太殿は拙者と同じ年でござるよ。」と言わられてクラス一同驚愕の声を上げる中

「そんな、私のセンサーが誤作動をつー?」と崩れ落ちたり。
お前ら学祭の出し物は?と突っ込みたくなるようなてんやわんやぶりだつたのだ。

「はつはつはつ、照れるでござるな。」

「誰も褒めてねーよ。」

明後日の方向を見つつ笑つて誤魔化そうとする楓に突っ込む気力も無いのか、

再びテーブルに突っ伏す翔太。

「夏の海水浴も面白かつたでござるしなあ。」

「おのれ鳴滝姉妹つ!貴様達のせいでおれのデートプランは破壊されてしまつたつ!!」

「ま、まあまあ、落ち着くでござるよ。」

海水浴の話に移つた途端がばつ、と身を乗り出して叫びだす翔太を抑える楓。

正直オープントラスで叫ぶ内容ではない。

実際の所一人きりでプールか海か……プールもなんだし海水浴にでも行くか、と言つ話になつたのであるが。

「海ですー!」

「お世話になるですー!」

鳴滝姉妹がくつ付いてきたりしたのである。

「まあ、拙者だけが海に行くというのも…………と言ひ話で『じわらひ』。

何、翔太殿とは

いつでも一人きりになれるでは『じわらひ』か。」とは楓の弁。

「お、オレとしちゃ楓と『テート』のつもりだつたのに子供が一人もついてきやがつた…………」「子供じゃないですー！」

「と言づかしょーたには言われたくないですー！」

と鳴滝姉妹との温かい交流があつたり。

「逆に考えるで『じわる』よ翔太殿。『これ以上拙者のクラスの人間がいなくてよかつた。』

「そう考えるで『じわる』よ。」

「考えられるかつーー！」

などと言ひ取りがあつたり。

とにかく親戚の子供三人をつれて海水浴に来た女子高生の団、みたいになつたという事である。

オチとして海水浴から後日、双子経由で再び某パパ活チが襲来したのだが余談であろう。

「まあ、その件に関しては拙者も反省している『じわる』。」

「…………次こそは一人きりだからな。」

「…………承知で『じわる』。」

微妙に顔が赤い二人。某生体ラブ臭センサーがいればその濃度に倒れていいる事だろう。

「体育大会やらもつづがなく終わったしなー。」

「相変わらず人外魔境でござったがな。」

麻帆良における体育大会はまさに人外魔境、と言つてもよい。

徒競走で世界記録が塗り替えられる、訳ではないが極めて非常識なハイレベルとも言える。

無論魔法の類を使つてゐるわけでもなく、純粹に『氣』を無意識レベルで活用してゐる生徒が多いだけの話ではあるのだが……。

「と言づか、障害物競走とかどこの軍事キャンプだよつて状態じゃねーか。」

「その障害物競走で一位を取つた翔太殿に言われたくないでござる。」

壁を登り、堀を這い進み、棒の上を落ちないようにバランスよく駆け抜けた。

軍事キャンプでなければバラエティ番組の企画のよつなコースだった訳だが、難無く翔太はクリアして1位を取つてたりする。

盛り上がる会場の隅で「ありえねーよ、ゼンの忍者だよあいつ……」と

某隠れネットアイドルが呟いていたかどうかは定かではない。

「しかしアレドヽヽれるなあ、円殿は絶対反則でござるわ。」

「…………あー。」

部活動対抗リレー。

その他の通りリレー競争で部活動同士が対決する、と喧うやつである。

お約束として剣道部ならフル武装、柔道部なら柔道着、相撲部ならまわし一丁だつたりと

部活動ならではの格好をして競技に挑む訳であるが、演劇部所属にして翔太のルームメイト巫女巴は……

「まさかウーディングドレス姿があそこまで似合つとは思わなかつたでござる……」

「想定はしてたんだがな。まさかその想定を斜め上で突破されるとは思わなかつたぜ。」

姿を見せた瞬間、ほつと溜息のよつた声が上がつた、と黙り込んで察していただきたい。

「本人は『似合つてると言われても嬉しくない』って言つてゐるがな。

「…………女としてはちとショックではあるでござるな。」

「気にすんな、お前が着た方が100倍似合つてよ。」

「つまり、祝言は洋式がいって事でござるな?」

「ヤーじゃねーよ。てか、どっちもやつやいにだらうが。」

などと先の早い話が繰り広げられ始めていたりする。

「と喧うわけで拙者は子供は3人は希望したい所でござるが、…………

「そうそう、話は変わるでござるが担任が変わつたでござるよ。」

「えらい話の方向転換つぶりだな、おい。今物凄い勢いで話がドリフトかましたぞ?」

そう言えば、神楽坂も今朝そんな事言つてたな…………『愛しの高畠

先生が……って。」

遅刻しただけで珍しいのに、妙に不機嫌だったのを覚えている翔太。

「『あのガキンチョのせいだー!』とか言ってたけどよ…………

触らぬ神になんとやら、で詳細は聞かなかつたけどな。」

「それで『じざるな。高畠教諭に代わつて着任したネギ先生で『じざる。

』

「葱? 根木? 妙な名前だな。」

「イギリスから来たと言つてたで『じざるが…………』

そうか、外国人と日本人のハーフか何かか、と考える翔太。

「イギリスといや、巴の方から『あっち』絡みで連絡が来てたな。魔法使いの修行とやらでこっちで教師する奴が来るつての。確か、そいつもネギつて言つてたな…………おつ、間違いない。」

懐からプリントを取り出して確認する翔太。

拙者、そんなプリント貰つてないで『じざるよ? いやオレが渡す訳だし。

などと呟つやり取りと共に楓もプリントを確認する。

「と言つか、このネギ・スプリングフィールドで『じざるよ。』

「数え10歳とか本気でガキンチョだな…………おい。」

写真つきのそのプリントには「魔法関係者は現時点において事情無しに魔法使いまたは

それに順ずる立場で彼に直接接觸する事を自粛するよ」と書いてあつたりする。

(要約)

「ようは『魔法使い』として早く独り立ちしろよ、つて事か?」「ちとスバルタでござらんか?」

「それだけ期待してる、と言うか早く育つて欲しいんだろ?ま、最低限のケツ持ちくらいはするだろうけどな。」

だとすると……と考え込む楓にどうした?と尋ねる翔太。

「いや何、ネギ坊主、初っ端から不審でござったからな。落下した黒板消しが頭の上で一瞬停止してござるし。」

「…………おい。」

大丈夫かその魔法使い、と他人事ながら不安になる翔太。その不安は後日、確定的になる。

「と言うわけで魔法使いな巴に聞くんだが。」

「え?え?、何唐突に?」

時は進み数日後。自室で朝食を取る駒井翔太と巫女巴の二人。

「魔法使いつてのは隠匿意識が薄くてもやつていけるのか?」

「えーと、どうしてそんな事を?」

「いや、楓から聞いたんだが……」

と某子供先生についての話(伝聞)を話し始める翔太。曰く、彼がくしゃみをしたら明日菜殿の服が脱げた。曰く、ドッヂボール大会で彼が高校生に投げつけたボールが服をひん剥いた。

等等……

「…………うわあ。」

思わず額を押さえる巴。

事実確認を行つた訳ではないが、事実ならば「ればひどこのオンパレード」と言ふる。

「と詰つか、ただのラッキースケベにしてもひりやまけしかりんつて感じじゃねーか。」

「羨ましいのかけしからんのかどつちかにほつよ…………」

と詰つか、羨ましいとか言つてたら長瀬さんにはほつじじゃない?と突つ込む巴。

「『太はまあ置いておいて、だ。』

前に貰つたプリントに書いてた簡単なプロフィールにや、魔法学校飛び級主席卒業、とか

書いてたが……あれか、見習い魔法使いつて詰つのは主席でもこんなもんなのか?」

「ま、まあほら。まだ数え10歳の子供だしさ、少々は大目に見ようよ、ね?」

一応フォローは入れる巴。

「セクハラ教師、つて書くと途端に懲戒もんだぜ?」

「うう。で、でもほら、教師としてせりやんとやつてゐつて聞いてるよ~。」

「やつてなきや本氣でただのセクハラ教師じゃねーか。」

いやまあ、年齢考えると悪戯好きのガキンチョでもいい気がするが。」

楓の発言を総合すると「変態とこのやうな紳士」か「紳士とこのやうな変態」でもいい気はするが、と内心思つていたりする翔太である。

「まあ、それはさておいて…………だ。

もし楓に何かやらかしたらオレはまつこにしに行くからな。」「こきなり宣戦布告！？」

「当たり前だろーが、好きな女そんな田に令わせられて黙つてる訳にもいかんだらん！」

むしろ、先手を取つてもぐか？などと物騒なことを考える翔太。

「しょ、しょーちゃん？ちょっと冷静にならひ、ね？」

「オレはこれ以上も無く冷静だぜ、頭は冷静に心は熱く、ってな。

と言つわけでちよつともこで来る、と出かけよつとする翔太と、それを止めようとする巴の間で一戦おつ始まつたわけではあるが双方とも終了しただけ述べておく。

「そーいやよ…………」

「何、しょーちゃん…………？」

「オレ、そいつがどこに住んでるのかしらねーわ。」

担任やつてる2・Aの生徒の部屋で住んでるよ、とは言えなかつた巴であった。

第六巻・強襲、子供先生でいるやうの巻。（後書き）

微妙にタイトル詐欺でした（こいつ）。

第七巻・馬鹿共が図書館で夢の跡を探る、の巻（一）（前書き）

忍者強化用刊、ヒントだけではありますん
どうかと言ひと現実逃避じゃつか？（おい

第七卷・馬鹿共が図書館島で夢の跡だらけの巻（1）

期末試驗

中間試験に並ぶ学業のイベントである。
2年の3学期の期末ともなれば3年時、そして高校受験への影響も
濃くなつてくるのだが……

「全体的に緊張感ないよねー。」

- N キニヤアナハ

「ここに一人いるけどね。」

麻帆良男「子守等語」 - A

男が
一人

「何だ、悪いのかよ？」

駒井翔太その人である。

「いやいや、勉学に勤しむのは悪いことじゃないぜ翔っち。」

「そり悪くなるお前もやれるこの太さをよ

そう言いながら疲れた目を押さえ、天を仰ぐ形で小休止する翔太。

「…………でも、多分翔太君ぐらいだよ?」このクラスで眞面目に勉強してるの?」

「しゃーねーだろ、親が煩いんだよ親が。」

長井の言つとおり、他のクラスメイトはまつたり通常運行にも関わらず翔太一人が真面目に勉強しており……非常に浮いている。

「もしかしてしょーちゃん、飛び出してきた口?」

「もしかしなくても飛び出してきた口だよ。その分成績は納得させるだけのもんは出さないとならねーんだけどな。」

それに……と、続け。

「楓にも教えなきゃならんし。」

「くそ、翔つちのリア充め。」

「…………もげる、つて奴かな? まあ、僕はそれほど興味ないけどね。」

実際の所、学祭の折に楓が来た時はクラスメイトがパニックを起したほどである。

「何でこんなスタイルの美人がこんな所に!」「何、翔太の知り合いだと!—」

「しかも婚約者、だと…………(「くつ)」と言つのが簡単な流れである。

「リア充め、全滅にしてやる!—」と殴りかかつて口づつとする奴、

「嘘だそんな事!」と

オンドウル語で絶望の声を上げる奴、「この俺の田を持つてしまも見抜けなんだとは…………」

と唚然とする奴。まさにカオスな空間が形成されたと言つていい。

「いやあ、流石の拙者もドン引きで!」わるよ」とは楓の弁。

「でも、そんなに成績悪いの？楓さんって？」

「あいつ、昔つから勉強苦手だからなあ…………」

昔を思い出しながら答える翔太。

思い返せば小学校の夏休みの宿題から一緒にやっていた記憶がある。

「だから何で最終日まで溜め込んでるんだよー」

「いやあ、夏の醍醐味と言えばこれでござる。」

「こんな醍醐味いるかあつ……」

などと言つ心温まる会話が毎年のように繰り広げられた物であったのだ。

「なあ、翔つちよ…………」

「どつた太つちよ？」

そんな思い出話を聞かせると、富戸山が微妙な顔をしながら突っ込みを入れた。

「一緒に初日からこいつこいつやっていけばよかつたんじゃねーか？」

「…………あ。」

小学校6年間 + 中学1年間、全く気がつかなかつた解決法に翔太は啞然とした。

時間は過ぎて夜。

翔太は1人、夜の道を歩いていた。

散歩と言う訳ではない。

「実はちと手を借りたい事があるんで」「やるよ。」

と畠の救援要請を受けての出動なのであるが……。

「何でこの夜中に図書館島なんだ？」

そう、待ち合わせ場所は図書館島。

日本最大、いや恐らくは世界最大の図書館と言つても過言ではない
そー」。

翔太の所属する図書館探検部の活動の舞台もある。

しかし、楓と図書館の組み合わせにピンと来ない。

遂に勉強に用意めたか！とも思つがこんな夜中に来る理由が見当た
らない。

本人に聞けば分かるか、と棚上げしておくことにする。

図書館島前に到着すると、見覚えのある顔ぶれと初対面の知ってる
顔が一人いた。

図書館探検部の面々・綾瀬夕映、富崎のどか、早乙女ハルナ、近衛
木乃香・に長瀬楓、古菲、
佐々木まき絵、さらには神楽坂明日菜と彼女たちの担任であるネギ・
スプリングフィールド。
富崎と早乙女以外の女性陣は探索用装備を準備しており、ネギはパ
ジャマ姿で寝ぼけ眼だ。

「遅かつたで」「ざるな翔太殿。」

「何でこの時間から探索行くんだよお前ひ……」

「やつたー、うちのエースが来たー」とか「やはり楓さんに電話を

してもらつて正解でした。」

とか「勝負するアルよ！」とか好き勝手言つてゐる外野を無視しつつ呆れた声を出す翔太。

「『』に読むだけで頭がよくなる『魔法の本』があるのよー。」

「…………はあ？」

神楽坂の発言に「何言つてんだこいつ？」と言つ顔をする翔太。隣のネギ少年も初耳だつたのか、神楽坂の袖を引っ張つて何やらヒソヒソ話をしてくる。

「そーなんや、ウチらのクラスの解散の危機なんや。」

「期末テストで最下位だとクラス解散、特に悪かつた人は小学生からやり直しどとか…………」

近衛と早乙女の発言に額を押さえる翔太。

「どーしたアルか？」

「どーしたもーーしたもねーよ…………そんな阿呆な話があつてたまるか。」

もつすぐ3年、と言つての時期にクラス解散はまだしも小学生からやり直しどとか、常識的に考えてありえ無いだらう、と。

「しかし、『』の麻帆良ではありえてしまひのではないでしょうか？この世の中にはありえない事などあります。」

「仮に、天文学的確立でそういう事があつたとして、だ。」

こんな事してる暇があつたらその時間を勉強に当てるよ。」

「

翔太の言つことは正論だつたりする。

「至極^{ごく}」もつともな意見でござるな。」

「でも、今からじや勉強しても間に合わないし……」

納得はする楓と、出題範囲を考えるととてもとてもと判断する佐々木。

「おい、担任教師？それでいいのか？」

「え？ ぼ、僕ですか？」

ヒソヒソ話が終わつたネギ少年に話を振つてみる。

「い、いいんじやないでしょうか？」

「いいのかよ……」

アワアワしながらもそう答える子供先生に、大丈夫かこの担任と翔太が思つたかどうかは定かではない。

「ところでえつと…………どちら様でしょう？」

「あ、そうだな。自己紹介してなかつたな……駒井翔太、つてんだ。翔太でいいぞ。」

そつちの事は楓から聞かせてもらつてるぜ。」

よろしくな、と言つて手を出す翔太。「こちらこそ宜しくお願ひします、と握り返すネギ。

「えーと、長瀬さんの……親戚か何かですか？」

「…………なあ、オレはいくつに見える？」

「僕と同じ年だっ！」…………あだだだっ！」

ぎりぎりと握手した手に力を込められるネギ。
折れそうな痛みがネギの手を襲う。

「楓と同じ年だっ！」

「え、ええっ、そうなんですかっ！？　す、すいませんっーーー。
「まあ、一発で分かれつて言うのが無理でしょ。私だつてやつだつ
たんだし。」

謝り倒すネギに、その辺にしてあげたらと仲裁に入る神楽坂。

「と言づか、拙者も出会つた時はそうでござつたからなあ。」

「私もです。」

「ごめんなさい、私も…………」

「そう思わない方がレアじゃないかなー。」

「もう止める…………オレのライフは〇だ。」

フルボッコ状態で涙目の翔太だつたりする。

「それで翔太君は楓ちんの婚約者なんだよねー

「ええつ！？　そなんですかつ！？」

助け舟、と言づわけではないが一人の関係を明かした佐々木の発言
に再び驚くネギ。

「初めて紹介された時は驚いたアルよ。」

「クラス中がパニックやつたもんな。」

思い返す古と近衛。

「まあ、そういう訳でだ。オレの楓にちょっとかい出したから……分かつてるよな?」

「ど、どうなるんでしょう?」

恐る恐る聞いてみるネギ。

いやそもそも生徒にちょっとかいを出すとかそんな事をするつもりはないのだが。

「…………おでんを!」馳走してやる。」

「え…………?」

ぽかん、とするネギ。

おでんと並つとアレである。ジャパニーズオリジナルスープである。食べたことはまだないが、話に聞いたことはある。

大根おいしいよねー、最近食べてないアルナー、とのんきな声を出しているクラスメイト達の中で

ただ一人冷や汗を流してゐる人間がいた。

「しょ、翔太殿……気持ちは大変嬉しいのだが、それはやりすぎではござらんか。」

「どうしたんですか楓さん?」

そんな楓の様子を見て不審に思ひ綾瀬。

「翔太のおでん、ってそんなにまずいの?」

「いや、非常に美味でござるが…………」の場合はおでんは意味合いが違つてゐるでござる。」

神楽坂の問いに答える楓。

彼女曰く、この場合の『おでんを』馳走せらる』とは熱々のおでんを直接口に入れてやる、と言つ事なのだとか。

「『はい、アーン』って奴ねつ！」

「…………冷ましもしないよく茹つたおでんを』じ開けた口に投入するんで』やるがな。」

「え…………。」

一瞬にして場が冷える。

どう考へてもそれは喉を火傷するフラグだ。

「あわわわわわ。」

「心配すんな、考案はしたが今だ犠牲者は一人もいねーよ。」

そう、表沙汰にできる範囲では一人もいない。
あくまでも『表沙汰に』だが。

「と、とにかく時間も押してゐしそろそろ出発するですよ。」

「そうね、いざ行くわよ！－！」

そんな訳で、図書館島へ潜ることになつた一行であった。

「で、実際どう思つよ？」

「何がで』やるか？」

「『魔法の本』だよ。」

本棚の上を歩きながら翔太と楓が小声で話し合ひ。

「うーむ、魔法の事を考えれば実在してもおかしくはないでござる。

「とは言え……そんな本の存在なんぞ初めて聞いたぞオレは。」

まあ、この広い麻帆良の噂話全てを網羅してゐる訳でもないけどな、と補足する翔太。

「そもそも誰だ、こんな所に行こうなんて言いだした醉狂なやつは。

「最終的にはアスナ殿でござるな。」

風呂場でのやり取りを思い返しながら答える楓。

「あいつ……魔法信じたのかよ？」

精々古いを信じじるレベルだと思つてたのだが、と翔太。

「最近ネギ坊主とも仲がよいよつでござるし、ひょっとするとひよつとするでござるよ？」

「いいのかよ、それで……」

「ちらが関わる話ではないが、それでも大丈夫か?と言つ疑惑は拭えなかつたりする。

「しかし、何つーか保護者だなりや。」

「セウド! セウルなあ。」

制服の上着を着せてやつてゐる神楽坂を微笑ましい目で見る翔太。

「実際、アスナ殿と同じ部屋で生活してゐるだけだしな。」

「…………何？」

「正確にはアスナ殿といひの殿の部屋で同じ、でござる。」

「まひ…………」

翔太の目に黒い炎が宿る。

「そりやつまり、風呂は女子寮の風呂使つてゐる事か？」

「モーでござるなあ。たまにアスナ殿が放り込んでる姿も見られるでござるじ。」

拙者も遭遇したことがあるでござるしな、つて落ち着くでござるよ翔太殿っ！」

俺の女の裸を見やがったとか…………やはつ今こじでもぐか、と動こうとする翔太を

慌てて止めに入る楓。

「ええい、放せ楓っ！」

「殿中でござる、殿中でござるよー！」

じたばたと暴れる一人を見て、会話が聞こえていないネギ達は「仲がいいなー」と

気楽に思つていたりするのである。

最も「やんちやしょうとする弟を止める姉にも見えるわね」とか失礼なことを考へてる者もいるが、まあお約束の範疇である。

何とかかんとか翔太を宥め先へ進む一向、そして。

「こんな所があつたとはな…………」

「いやあ、驚きでござるよ。」

石造りの大きな部屋。

壁には本棚が並んでいる。

数m進んだ所に祭壇のようなものがあり、そこには本が一冊安置されている。

その左右には巨大な石像が2体。

「翔太さんのお陰で予想より速いスピードで到達できたみたいですね。」

「大したことはしてねーよ。」

時計を確認しながらそういう綾瀬に謙遜する翔太。
実際、大したことはしていないのである。

「いえいえ、斤候に行つて頂けたお陰で私たちも安全に進めた訳ですしね。」

「怪我人出すわけにもいかんだろうよ、一応不法侵入者だぞオレたち?」

真夜中に公共施設に侵入して中の物を持って帰らうといつのだ。
不法侵入どころか泥棒と呼ばれる部類である。

「あつ、あれは!？」

本を見て驚愕するネギ。

「ど、どうしたのネギ!?」

「あれは伝説の『メルキセデクの書』ですよ!?!」

信じられない！
僕も直接見るのは初めてです！！

神楽坂に問われてネギは興奮気味に返す。

「つて事はホンモノ

「ほ、本物も何もあれば最高の魔法書ですよー。」

「うーだーひーぢー.」

すゞーい、と感嘆の声を上げる佐々木をスルーしつつ疑問を呈する

『頭を良くしたい』って俗な願いを叶える魔法、って存在すんのか

「ええっと、一ヶ月ほどパーになりますけどモガツ！」

ぽろつと喋りそつになるネギの口を押さえる神楽坂。

「あはは、何でもない何でもないから！」

そもそも私たちは今、形振りを構つてゐる暇はないのよ！」「

そう言って「これで最下位脱出やーー」とネギの口を押されて抱えたままダッシュする神楽坂。

「あ、あたしもー！」と追いかける佐々木に、「一番乗リアルー！」

駆け抜ける古。

「あの様子だと、アスナ殿にはバレてるよつで」アゼルのなあ。」

「…………辺鄙すがるんじやね？色々とよ〜」

10歳児にそこまで求めるのも酷だ。そりやそりだけどよ、
と走り出す面子を見送りつつ会話を交わす楓と翔太

「つて言つから前ら、トラップ探知くらいやつてから……！」

はつ、と気がついたときには既に遅し。

祭壇へ通じる道が崩れ、その上にいた人間を下へと落とす。

「大丈夫でござるか！？」

慌てて駆け寄る楓。

幸いにして、深さはそれほどでもなかつたようだ。

正確には道のすぐ下に床があつたと言つべきであつつか。

「どうやら全員無事のようでござるが…………」

「『英単語ツイスター』だあ？」

その床には五十音の文字パネルが描かれており、どうみてもツイスターである。

むしろ、翔太の言つよつに『英単語TWISTER Ver10.5』と書かれてる訳で。

「10・5つて事はアップデート繰り返してる、つてことかよ？」

等と翔太が言つてると、祭壇の横に立つていた2体の石像が動き出し行く手を塞ぐ。

そして、本を欲しければ問題に答えるのじゃ、と某セミに似た宇宙人のような笑い声を上げる。

「拙者、あの笑い声に聞き覚えがある気がするんですけど」「

「奇遇だな、オレもあの笑い声に聞き覚えがあるよ。」

「ちょっとー！楓ちゃんも手伝ってーーー！」

どう聞いてもなあ？と一人で領きあつてる所で神楽坂が救援要請を出す。
流石に4人では厳しい、と判断したのである。ついでに、ツイスターゲームであることだし。

「あいあい、今行くで！」やるよ。

と言つわけで、ちょっと行つて来るで！」やるよ。」

「あー、気をつけてな。」

そつと楓を見送る翔太。

問題自体の難易度は低いし、ネギがヒントを出してるし、問題はあるまいと判断する。

この「トーレムを叩き潰す、と言つ選択肢もないわけではないが……まあ、平和的に本を取る取らないの話をするのならば大事にする必要もないだろ？」。

そつ思つていたのだが。

「お
「さ
「うー
「
「
「…………」「
「…………ねるー。」

最後の問題で神楽坂と佐々木が失敗したのである。

「違うアルよーツ！」

「外れじゃな、フオフオフオ。」

古の絶叫を合図にするかのように振り下ろされる石像のハンマー。寸分違わず床を砕くと、その場にいた全員が落ちていく。

「つて、おいつ！！」

一人ツイスターの盤上に載つていなかつた翔太が楓だけでも助けようと飛び込むが既に遅し。

皆仲良く穴に落ちていくだけの結果になってしまったのである。

第七巻・馬鹿共が図書館で夢の跡を探る、の巻（一）（後書き）

本当ならこの回で図書館島編を終わらしと申つたんですが、存外に量が多くなつたので分割することに。

> 2 - A

実はクラスがどこか決めてなかつたりします。W
と言つわけで 2 - A にしました。

……決めてなかつた、よな？（おい

第八卷・馬鹿共が図書館島で夢の跡でござれぬ、の巻(2)(前書き)

図書館島編、終了。

予め断わっておきますが、当作品はネギアンチではございませんw
…………それはず、つん。

「何だよ、こいつは……」

首を振りながら起き上がる翔太。

辺りを見回せば、一の姿もある。

そこは巨大な地下空間が存在していた。

遠くには何かの建築物の姿すらある。

壁や天井に何か仕掛けでもあるのだろうか？地下と言うには余りにも間違っている。

綾瀬曰く、「幻の地底図書室」ではないかとの事。

「ねえ……そういやそんな話もあつたよなあ。」

「知ってるでござるか?」

図書館検索部など誰でも知ってる話だよ

翔太の呴きを聞いたか、楓が近づいてくる。

「大丈夫かよ？」

「全く問題ないで」
「うるさいな。 相当高い所から落ちたと思ったので」
「うるさいが…………」

翔太は警笛を吹いたが、井戸を飛ばす風。

上を見上げれば相当高く、天井を目指して登る訳にもいかないだろ

う。

「のわりにや、無事なんだよな。」

「……アスナ殿が怪我してゐるゆうでいるのがな。」

そんな神楽坂に何かをしようとしているネギの姿。

「大っぴらに何やってんだあいつ…………」

「まあ、見てるのは拙者たちだけじゃれるし問題ないでじゃれるよ。」

しかし、なにもおいらなかつた。

「の、割りにや何か起きた様子も見られねーな。」

「うーむ、もしかして魔法を封じてるんでは?」

首を傾げる一人。

「発動判定に失敗しただけじゃねーの?」

「それならもう一度試してくるでござるよ。」

「それもそーだな。」

そつとこいつへ、神楽坂達の方に近づく。

「肩でも打つたか?」

「あ、はい。どうもそつみたいで……」

「だから大丈夫だつて。」

慌てて突き出していた手を引っ込めるネギと、苦笑しながら何でもないよつこいつの神楽坂。

「そう言つが、何か問題があつてからだと遅いぜ？」

打ち身だけだと思つたら折れてた、つて話もあるしな。」

「切り傷から骨折まで、大体の怪我は診れるでござるよ。」

「ま、まあそこまで言つなさい……」

「いやつ、と話に加わる楓にじょうがないな、と言つ感じで同意する神楽坂。

なら方針定まらぬ今のうちに済ませるでござるよ、と楓と神楽坂は少し離れた所へ。

怪我を見る、と言つても袖を捲り上げる形で傷口を確認して包帯を巻くだけであるが。

「ひょっとして僕、要らない子なんでしょうか…………」

「そう思うなら、あつちで相談してる連中の相手になつてやれよ。担任なんだから最低でも自分の生徒くらいは責任持てや。」

そんな様子を見てずーん、と落ち込むネギに声を掛ける翔太。実際、綾瀬や佐々木、古などがどうあるべきかと頭を悩ませている。

「あいつ、割と抱え込むタイプか…………まあ、切り替えも早そうだけだな。」

生徒達を激励するネギの姿を見ながら翔太。

「しかし結局勉強する事になるんでござるなあ。」

「何事も日々の積み重ねなんだよ。で、神楽坂の様子は？」

「落ちた時に打ち付けただけでござるな。後はひょつと切った程度でござる。」

いつの間にか横にいる楓に神楽坂の様子を聞き、そうかと頷く翔太。

「しかしアレだよな。」

「ふと思い出したように咳く翔太。

「どーしたでござるか?」

「いやよ、上じゅ今頃あの辻斬リストーカーが混乱極地の極みなん
じゃねーのか?」

『ああつ、こんな事なら密着警護で24時間マンツーマンしてれば
よかつたつ!』ってよ。』

何故か無駄にそつくりな声真似までやりながら頭を抱える演出をする翔太に苦笑する楓。

「そろそろ辻斬り呼ばわりは勘弁してあげて欲しいでござるよ。クラスマイトでござるし。』

「だが断わる。てかストーカーなのは否定しねーのかよ。』

「……」

「何かコメントしろよつ!』

そして翌日。

「だから、この数字をこの式に代入するとだな……

「おお、なるほど。』

一人は個人授業をしていた。と言つか補講である。

つい先ほどまで、ネギの青空?教室が行われていたのだが。

「で、分かったのかよ?』

「いやあ、ちと分からなかつた所が……」

と言ひわけで休憩時間を使つての勉強と言ひわけである。

「ひつかし……出来すあだよなあ。」

「何がでじやれるか?」

一通り楓の勉強を見終わつてから息を吐き出すように翔太。そんな彼に尋ねる楓。

「いやよ、食料から教科書からトイレからキッチン、黒板まで!揃いすぎだらうよ。

しかも教科書は参考書含めて全教科揃つてるときやがつた。

「確かにひとつ出来すあじやれるでじやれるなあ。」

翔太の発言に頷く楓。

ふと思つて口に出してみる。

「…………つまり、ソリに来るまでは全て計算のひかといひとでござるか?」

「そり考へておこしていんじやねーのか?でなあや、ソリまで準備しちるかよ。」

トイレやキッチンはわざとおも、普通黒板や教科書をこんな所には置かないだらう。

いくり地底図書室とは言へ、だ。

「と恤ひひとは……」

「どつかに脱出の手段はある、ソリにいたな。」

来ることが計算済みならば、出すことも考へてあるはずである。テスト対策が行えるように準備をしてあるのだ、外へ返さないといふ事はないだろ？。

「んじゃまあ、オレはそいつの方を探してみるわ。流石にそりそり帰らないとまずいだろ。」

「夕映殿は『ここは楽園です』とか言つてたで、『それのがな。住み着いても驚かん』じゃれるよ。」

「いやいや行方不明なんだからよオレ達。」

そう言いながら立ち上がる翔太。

「では拙者も……」

「どうた？」

「少し気分転換に水浴びでもしてから、まじめに来て来るで、『それのよ。一緒に来るで、』『あらぬか？』

同じよひに立ち上がると楓はこいつと笑みを浮かべる。

「いかねーよ。ここで言ひと謂かもしねーから心配しないで行って来い。」

「覗いてもここんで、『ざるよ。』」

「いいから行つてこいつてんだつー。」

ちとからかい過ぎたで、『ざるかな、』と楓は素早くその場を去つて行く。

そして、翔太もまたその場から姿を消したのであった。

「あつさつ見つかりやがったな……」

十数分後。

滝の裏側に隠された扉を見つけた翔太だつたりする。

しかも『非常口』と書いてある事から間違いない出口だと判断する。

余談ではあるが、この頃某子供先生が生徒達のサービスシーンと遭遇するはずであつたが、

何を感じたか、ラッキースケベなイベントを自力回避すると『四つ偉業クエストを成し遂げる。

おでんのダイレクト投下とかマジ勘弁、と言つ話なだけではあるのだが。

「しつかしまあ、ここまでするか？」

扉には問題が刻まれたプレートがあつたりする。

恐らく、これを答えなければ扉は開かないのであろう。

ともかく戻つて報告だな、と考えていると悲鳴が耳に入つてくる。

何があった、と声の方を進んでみれば徐々に見えてくるのはゴーレムの巨体。

その腕には佐々木の姿、そしてゴーレムの周りには他のメンバーがいて……

「食らえ、魔法の矢……」と指をゴーレムへ向け叫ぶネギの姿が。

だが、それはチャンスだ。

魔法が解けたのなら時間差で一撃、解けてなくともフェイントで一撃。

きつちつ三つの風魔手裏剣をゴーレムの胴体へと投げつける。

不発でしーんと静まり返ったそこに投げ込まれた風魔手裏剣は狙い

違わずゴーレムの胴体に

突き刺さり、その衝撃はゴーレムにたたりを踏ませる。

そして、機を見た楓が古に声をかける。

「古、今でござるよー。」

「任せるアルよー。」

以心伝心、言葉は無くとも心は一つであった。

古の拳の一撃がゴーレムの脚に鱗を入れ、そこから繋げた蹴りがゴーレムの手を蹴り飛ばす。たまらず佐々木を手放すゴーレム。そして、落下しそうな佐々木を救出する楓。

「出口を見つけたぜー。」ちだつー。」

「フォツ、何じやとー。」

その頃合を見て翔太は声をかける。

非常にアレン格好をしている一団（除く子供先生）ではあるが、今はその事は気にしない。

最優先されるのは出口を発見した、と言つことである。見つけられた事に驚くゴーレム。

「ちょ、ちょっと待つてや、荷物取りに戻らんとー。」

「拙者が取つてくるでござるよ。後で追いつくゆえ、先に進んで欲しいでござる。」

近衛の代わりに楓が荷物を取りに走り出す。

「こまま真っ直ぐ走れー。その先の滝の裏側に非常口だー。」
「オレが食い止めるー。」

残りの面子にせつて先に行かせる事である。

道は一本道な以上、迷つても無いだろ。」

「せうはせんや、お主らはこいで一生を過ぐすのじやーー。」

「…………それはありかも知れません。」

「ねーよつーケツ蹴飛ばされたくなけりやとつと走れつーー。」

ちょっとだけそれもありかな、と思つてしまつた綾瀬だつたりする。翔太にケツを蹴飛ばされるかのように走らされた羽田になるのではあるが。

そして対峙する1体と1人。

「フオ、大人しく通すのじやー。」

「わりいが、ここれからは通さんぜ？…………学園長先生よ。」

沈黙。

「ふ、フオッ、ワシは『一ーレム』であつて学園長とは無関係なのじや。」

「OK、学園長、一ーレムと命名してやるよ。」

くぐもつてはいる物の、じからビリ聞いても声は学園長そのものである。

「さて、オレの楓の裸を見た覚悟は出来るだらうな？」

「フオッ！？ む、落ち着くんぢやー全部見とつたわけではないつ

ー！」

翔太の眼光とその声色に、やしもの学園長が「コーレム越しに一瞬怯む。

「つまり、一部だけならばちり見てた、つつーわけだな?
…………オレの楓の裸を見たその報い、10倍返しで受け取りやがれ
つ……」

学園長、コーレムが反応するより早く。その次の瞬間、辺りを爆炎が
彩った。

「おー、何か凄い煙が上がってるアルねー。
「だ、大丈夫なんでしょうか……」

一方滝の非常口の前。

ネギとバカレンジャー一行（・楓）は着替えの到着を待っていた。
彼ら自分たちだけだからとは言え、流石にタオル一枚で移動は恥ず
かしい。

（自称）英國紳士たるネギ少年的にも大変日の毒であつたりする。

そこに爆音と立ち上る煙である。

派手なドンパチを想像して興奮する古と心配顔のネギ。

「心配」無用だわよ。
「楓ちゃんおそーい。」

すまんじゅわる、と佐々木に謝りながら着替えの服と荷物を渡して
いく楓。

当然自身は着替え済みだったりする。

「本当に大丈夫なの？」

「あれで強さは折り紙付きでござるよ。拙者が保証するでござる。」

「せやなー、運動神経じつついもんなあ。」

心配する神楽坂にフォローを入れる楓と近衛。

「……………そつなんですか？」

「はい、図書館探検部でも一・二を争う運動神経ではないでしょ
か？」

生徒達の着替えを見ないよう後ろ向きのまま質問するネギに、着
替えながらも綾瀬が答える。

「でも、あの煙は何だったのアルか？」

「…………ちょっとやりすぎたんでござりやうなあ。」

何となく何があつたかを想像した楓は「コーレムに対して默祷を捧げ
る事にしたのである。

その後に關して、取り立てて語るべき事は無い。

無事に翔太は合流し、問題を一問一問解きながらゆっくりと前へ進
み。

エレベーターに乗つて地上へと到着したのだから。

「で、テストどうだつたんだよ。」

「波乱万丈でござつたが問題は無かつたでござるな。そういう翔太
殿は大丈夫でござつたか？」

テストも終わってスターブックスのオープンカフェに翔太と楓の二人の姿があった。

「おかげさまだな。一田田が一番楽な教科でよかつたぜ……」

ふう、と胸をなでおろす形の翔太である。

地上へ到着後、現地解散の形で寮に戻ると勉強を始めたのだから。

「こつちも解散後最後の追い込みと言つ事で勉強を始めたんでござるが……」

「どうした?」

「翌日寝坊してしまったでござる。」

「笑い事じやねーよ!」

はつはつは、と笑う楓にとりあえず突っ込みを入れる翔太。

「いやいや、結果的にテストは受けられたのだから笑い話でござるよ。」

「そりや そりだけじよ……で、結果は?」

いや、そもそもクラス解散つて言つのはマジなのかよ?」

「無論翔太殿の言つてたようにドラマでござつたが、代わりにネギ坊主が首になるならないの

瀬戸際だったようでござつたな。」

「は?」

何でも、クラスを最下位から脱出させれば正式に教員採用だと言つ話だつたとのこと。

それを聞いて翔太は頭を抱えてしまつ。

「つまりアレか、あのガキンチョは自分が正式採用されたいから容認したのか？」

放課後使ってでも成績アップの為の大勉強会でも何でもやれってんだ……」

「その結果が英単語……」

と言いかけて口を噤む楓。

あの件を翔太に聞かせることはネギ坊主にとつての死亡」「フラグ！！流石にいたいけな少年（しかも担任）が口の中を火傷してのた打ち回るのは氣の毒ではある。

「…………どつた？」

「い、いや何でもないで」「ざるよ。それはさておき全教科無事にテストは解けたんで」「ざるが、

成績発表で見事にビリだつたで」「ざるよ。」「おい。」「おい。」

はつまつは、と何とか件の件を誤魔化しつつ話を逸らす楓。

「いや、実は採点者の学園長が遅刻組の採点結果を報告するのを忘れてたようだ」「ざつてな。

…………しかし、どうしたんじ「ざるひつなあ？あひこひつ包帯だらけで痛々しい姿で」「ざつたが。」

「何で学園長が成績採点をするんだよ……遅刻だらうが採点は担任の仕事じゃねーのか？」

再び頭を抱える翔太ではあるが、後者に関してはノーコメントを貫くことにする。

まあ、大体何があつたかは想像がつくであろう。
そこを察するのが優しさである。

「まあまあ、サプライズしたかったんで」「やれやれ。学園長の茶田な所あるで」「やれるし。」

「…………お茶田で済まない事もある気がするがな。で、結局の所どうだつたんだよ？」

「つむ。見事2・Aがトップになつたで」「やれやれ。」

「うが、やつド」「やれるよ。」いついつ一人は「一ヒーを歴る。

沈黙。

「いや、もうちょっとリアクションがあるので」「やれやれ。」

「何をどうアクションしなりつてんだ。集中講義の成果は帰り道の問題で証明できたんだ。」

よつぽどの事が無い限りはいい点取れるとオレは思つてたよ。」「

翔太殿……

思わず感動する楓だつたりする。

「つーかよ、普段からそれくらい勉強して置きやがれ、勉強を。」「いやあ、拙者が勉強嫌いなのは知つてる」「やれやれ。」

そんな翔太の説教をにんにん、と楓は流す。

「…………甲賀中忍、それでいいのか？」

「それでいいんで」「やれるよ。」

「いいなら構わんけどな…………ま、何にしきれでネギ先生殿は晴れて担任、つて訳か。」

「3年も脇やかになつそつで」「やれるなあ。」

そう言いながら青空を見上げる一人なのであつた。

余談。

「あ、翔太さんお久しぶりです。」

「あ、ネギ坊主。久しぶりだな。元気してますか?」

〔はしあわせの隠れ里〕

「ええ、大丈夫です。

「いやなに、ちょっと聞きたいことがあってな。」

「何でしょう？僕に分かる」となら何でも……

神楽坂から聞いたんだが『英単語野球拳』ってもんをやったんだ

「……」（龍たな戸）

四

「ま、待つてください！僕は決してそういうつもりでは……」

(必死)

その後のネギ少年の行方について知る者はいない…………わけはなく、夜、無事に学生寮の方へ帰宅した事が確認されている。

たそ^うである。

それを知った某忍者は子供先生へ黙祷を捧げたと言う。

「少しやりすぎでは？」ざらんか？」

「大丈夫だ、問題ねーよ。」

大人気ないと見るかそうでないかは、当事者以外が判断することで
ある。

第八卷・馬鹿共が図書館島で夢の跡でござれぬ、の巻（2）（後書き）

次回からは桜通りの吸血鬼編。

第九巻・忍者（時々魔法使い）VS吸血鬼—桜通りの決斗—！でござる、の巻

シリアルス…………と思つたら大間違いだぜっ！（え
相変わらずかわいそうな『闇の福音』さんの話です。

……いや、本当に嫌いじゃないんですよ俺？

第九巻：忍者（時々魔法使い）VS吸血鬼！桜通りの決斗！！でござる、の巻

吸血鬼の真祖、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは大変不機嫌であった。

満月の日の前後において夜な夜な『桜通り』において吸血活動を行つてきた彼女。

理由は簡単、『サウザンドマスター』ナギ・スプリングフィールドによつて（でたらめな魔力でテキトーに）掛けられた『登校地獄』と言つ強力な呪いを解呪する為に、その血族であるネギ・スプリングフィールドの血液を手に入れるだけの力を蓄える為である。

本来ならば真祖たる自身の事、人間には及びもつかないだけの魔力を保持しているのだが、何故か学園祭の時期以外は魔力が常人並みにまで落ち込んでいるのだ。

魔法薬を触媒として魔法を行使するにも魔力は必要であり……結果、人の血を啜る事で魔力を補填しようとした訳である。

例え600年の研鑽と優秀かつ忠実な従者・茶々丸を従えていても、魔力が無ければただの人間と変わらず、満月の前後でなければ吸血鬼としての力も振るえない有様である。（その振るえる力とフルパワーからすれば微々たる力でしかないのだが）

相手は仮にも『サウザンドマスター』ナギ・スプリングフィールドの息子。

万全の体制を整えねばならず。実際に麻帆良に来た息子であるネギを見る限りでも、

その魔力は正に父親譲りの物と言え。

これだけの高濃度の魔力を秘めた血液・それもナギの血縁の・を使えば『登校地獄』も

確実に打ち破れるに違いない、と確信を得るだけのものはあった。

そしていよいよネギ・スプリングフィールドをおびき出すべく、彼の関係者・つまり自身のクラスメートになる訳だが・を狙うこととしたのだ。

彼の性格からすれば痕跡さえ残せばまず間違いなく行動を起こします。そう睨んで。

吸血による魔力量の観点から言えば近衛木乃香辺りは超優秀なのではあるが。
流石に学園長の血縁を狙うと後々ややこしい話になる。

護衛の桜咲刹那も煩くなる事ではあるだろうし。

そんな訳で、たまたま夜に歩いていた佐々木まき絵を狙つたのだが
……邪魔されたのだ。

邪魔した相手はやはり同じクラスの長瀬楓。当人は否定しているが立派な忍者である。

最近になつて裏の仕事・正確には外敵からの学園警備・に関わり始めたようだ。

顔合わせの機会もあつたのだが、話だけ聞いて行かなかつたのだが面倒くさかったし。

最も、正確には田にも止まらぬ早業でまき絵を回収され、分身を置

いて逃走されたのだが。

正直な話をすれば分身の出来は感心するほどで。
あそこまで密度のある分身を完成させるとなると、相当な修行を積
んだに違いない。

何しろ、自身も一瞬本体か分身か判別できなかつたくらいである。

これが本体ならば正体までバレて後々やりにくくなつたのではある
が、幸か不幸か自身の顔を
見たのは分身の方。ならば情報の共有が無い以上は正体がバレた訳
でもなく。

何より今日一日様子を見ても、自分への視線はなかつた事をみると
問題は無いだろつと判断。

尚且つ、佐々木まき絵の証言により『桜通りの吸血鬼』の脅威はネ
ギに情報として伝わり。

恐らくは今日当たり、夜回りを決行するだろつと踏んでいる。

万が一来なければ……来月まで予定を延ばさざるを得ないのだが。

そんな訳で、今日も『桜通り』にて待ち伏せてる……もとい獲物
を待ち構えている所である。

無論、誰も通りかからないと言う可能性はあるが、夜間外出禁止令
が出ているわけでもなく、

魔法先生・生徒の類が巡回している訳でもない。

恐らく学園長辺りは察しているだろうが・愉快犯ではあるがボンク
ラではない -

この私を踏み台にさせる気かとも考えるが、どの道避けては通れな
いのだ。

吸血鬼、それも600年生きた自身からすれば決して長い年月ではない。

しかし、だ。その15年間を呪いの為に延々と女子中学生としてノーテンキな連中と過ごす日々。

最初の頃こそ、それは新鮮な感覚であり毎日が新しい発見の連續であつた。

しかし、もはや苦痛以外の何物でもないのだ。

繰り返される3年間、一人だけ同じ場所をループしているような感覚。

呪いを解除しようにも、その膨大な魔力と適当な術式はそれすらも困難にし。

唯一呪いを解ける術者は風の噂で死んだと聞いた。ナギ

ならば、その息子の血をもつて呪いを解除する。

しかし、呪いを解いて自由になったとして。

籠から外へ出た鳥は、どこを目指して飛べばいいのだろうか？

そこまで考えて、ふと現実に帰る。

少女の声を耳に捕らえたからだ。

その方角には、こちらへ歩いてくる生徒の姿。

俯きがちで、前髪で顔を隠した一人の少女……富崎のどか。

何かを口ずさみながら、おつかなびっくりと言った様子で『桜通り』を歩いている。

丁度いい。今日の獲物はお前にしよう。

『彼女』が気がついた時、『それ』は街灯の上にいた。

黒いとんがり帽子に、黒いマント。まさに『魔女』を体現するような出で立ちで。

話に聞く『桜通りの吸血鬼』とはまさにアレの事だらうか？一瞬たじろいだ『彼女』に黒き吸血鬼は告げる。まさに死の宣告を下すかのように。

「二つ番、富崎のどかか……悪いけど、少しだけその血を分けてもらひなよ？」

そう言つて飛び掛る『吸血鬼』。翻る黒いマントは翼のようで。

『彼女』が何かするよりも早く乱入する一陣の風。

「待てーっ！ ほ、僕の生徒に何をするんですかー！」

杖に乗つて空を飛び、『戒めの矢』を放つネギ・スプリングフィールド。

攻撃力も低く、相手を捕縛する事に特化した11発の魔法の矢。それを迎え撃つべく振り返り、魔法薬を触媒にし『氷盾』を発動させようとする吸血鬼^{エヴァ}。

だが、予想外の出来事が彼女を襲う。

魔法薬を取り出す一瞬のタイミングとまさか、という思いが判断を鈍らせて。

さういふに言えば背中を向けた事が致命的で。

『彼女』が前へ踏み込む。かつん、と言つ音。

踏み込みと共に放たれた一撃を、吸血鬼は対応することすらできず。

魔法障壁すら打ち抜かれて背中の急所に一撃を貰い、悶絶する吸血鬼^{エヴァ}。

「うわあ…………」

そこからの行動は、さしものネギも唖然とするしかなかつた。すかさず吸血鬼を羽交い絞めにしたかと思えば、空へ舞い上がつたのだ！

当然、人が空を飛べる訳も無く。真つ逆さま下へと落ちていく。

「これぞ『忍法・百舌落し』つてな？」

落ちていく瞬間、その声が吸血鬼に聞こえた……気がした。

地面に激突する形で叩きつけられたのは吸血鬼のみ。それも頭部から埋まるよつた形で。

そして、同時に着弾する11本の『戒めの矢』。

……ついして、哀れ吸血鬼エヴァンシヨーリンは大変みつともない姿になつたのである。

足を突き出して頭から地面に埋まる形で尚且つ『戒めの矢』でぐるぐる巻き状態なのだから。

ネギ・スプリングフィールドは驚愕していた。

クラスで話題になつた『桜通りの吸血鬼』。

昨日の晩も担任クラスの生徒である佐々木まき絵が襲われたと言つのだ。

間一髪、同じクラスの長瀬楓が助け出したそのので、何も無かつたのが救いだつたのだが。

とは言え、そのままにしておく訳にも行かないだろ？

正体こそ不明ではあるが、本当に『吸血鬼』ならばまたクラスの生徒が襲われる可能性もある。

そんな訳で今日は晩御飯いらないと言い残し、夜回りに出た所で生徒である宮崎のどかが

『桜通りの吸血鬼』と思しき影に襲われている所を目撃し介入に至つたのであるが……

正直、想定外で思考が追いつかないというのが実情である。誰が想像するだらうか、まるで熟練の兵のように相手を撃退した宮崎のどかの姿を！

「す、凄い…………」

としか言ひようが無いのだ。

そんな彼を見て、宮崎のどかがこちりを見る。

「よひ、ナイスアシストだつたぜネギ坊主。」「…………え？」

聞こえてきた声は明らかに男の物であり。

そして、聞き覚えのある声である。

「しょ、翔太さんです…………か？」

「おうよ、まさかこんなにあつさり行くとは思わなかつたぜ。」

恐る恐る尋ねると肯定の返事。

それと同時にぱつ、と制服を剥ぐと出でてくるのはいつもの私服に身を固めた駒井翔太の姿。

違うのは履いてるのが高下駄だ、と言ひじだらうか。

「あのう、一体どうこう」となんでしょうか……」

例の件以来、若干の苦手意識があるのか引け腰で尋ねるネギ。
何故彼がクラスメイトの変装をしてこんな所でこんな事をしている
のだろう?と。

「いやな、楓の奴から『吸血鬼が桜通りに出没してる、と言つか出
会った』って話を聞いてな。

放つておいて楓にちよっかい出されたくもねーし、知ってる顔が襲
われるのも田代め悪いしよ。

変装して巡回検査でもやるかと思つてみたら案の定と言つ奴さ。」

高下駄を脱いでどこに仕舞つていたのか運動靴に履き替えながら答
える翔太。

実際の所「『桜通りの吸血鬼』に關しては手出し無用」の通達が届
いているのだ。学園側から。

この件はネギ・スプリングフィールドの試練の一環であり手出しす
る事ならず、と。

エヴァンジエリン自体が女子供は殺さない、と公言しており尚且つ
血を吸われて吸血鬼化

した所で解除も難しい物ではない。

真相を把握している学園長からすれば、ネギへの丁度いい教材とも
言える物なのだ。

ついでにエヴァンジエリンのストレス発散にもなり一石二鳥である、
と言う考え方である。

それに、仮にネギが破れて『登校地獄』の呪いが解けた所で今更賞

金首生活に戻るわけも

無いだろ？』と言つ見込みもある。その時は改めて話し合えばよい、と。

無論、そこまでの事を知るよしもない彼は「そんな通達見てなかつた」と介入したのだが。

「それで、その衣装とかは…………？」

「あ、これか？あんまり気にすんな。つか企業秘密と言つ事で頼むぜ。」

さらりと答える翔太。

忍足の物、変装の一いつや一いつ出来て当然である。

……彼の場合、身長がとことんネックになるのだが。

今回の件に関しては高下駄を履いて身長をカバーしたのだが。

「でも何で富崎さんに？」

「特に理由はねーな。あえて言つなら身近の人間で身長が限りなく近かつたからか？」

「いえ、疑問に疑問で返されても…………」

「それにこの手のタイプなら狙つてくると思ったしな。」

本物の富崎のどか（+図書館探検部）には夜は外に出ない方がいい、と忠告してある。

部活動自体も早めに切り上げるよつに誘導し、寮までの見送りまでフォロー済みである。

寮の方も万が一に供えて楓に警護を依頼している訳で。

「さて、後はこいつをどうするかだな…………まるで『犬神家』だぜ。」

「

「『犬がミケ』？」

拘束されているからなのか、激突の衝撃で気絶しているのか。
はたまた既に息をしていないのか。あられもない姿で地面に突き刺
さつている吸血鬼を

見ながらこれから対応を考える翔太。

そこで出てきた謎の単語に首を傾げるネギ。犬なのに名前がミケと
はどういう事だろう？

「いや、発音がおかしい。『いぬがみけ』だ。」

「『イヌガミケ』ですか？」

「……微妙に発音がおかしいけど、大体それであつてるし良いだ
ろ。」

「それで、結局何なんです『イヌガミケ』って？」

そんなネギの疑問に答えてあげることにした。

「『いぬがみけ』と言つのは犬神さん家の3姉妹の日常を描いた漫
画でな。

おつとりのほほんとした不思議系長女と、しつかりもので運動神經
抜群だがフレッシュシャーに弱い

次女と、現実的でちょっと金に煩い三女、それに出張で滅多に帰つ
てこない父親とメスなのに

オスの名前がついた飼い犬の心温まるホームコメディ、って奴だ。

「……これとは全く縁が無さそうなんですけど？」

ちら、と『これ』を見ながらネギ。、

今の中でも頭から地面に突き刺さつてゐる人間が出てくる図、と言
うのが全く思い浮かばない。

そういう感じになると、『戒めの矢』の効果時間が過ぎたのか拘束が解ける。

同時によひやすく重力があることを思い出したかのように垂れ下がる衣服。

幼いながらも艶めかしい白い足や下着がまる見えの状態で、（自称）紳士のネギとしては眼を逸らさざるを得ない。

しかし、本人が倒れる様子が無い辺りどんな突き刺さり方をしてるんだろうか？

「まあ、コメディだしな。そんなシーンもあるんだよ。
気になるならアニメにもなってるし、レンタルビデオでも探すとい
いと思うぜ？」

「わ、わかりました…………そうします。」

そこに走り来る影。

ふつ、と翔太とネギが振り向いた時には既に遅く。

「何また嘘ばつか付いてるのよっ！」
「げふっ！！」

神楽坂明日菜の飛び蹴りか翔太にダイレクトヒットしたのである。

「い、痛つてえ…………顔が蹴られたみたいに痛えつーー！」

「見たいじゃなくて蹴飛ばしたのよ、じゃなくて何ネギに嘘八百教
えてるのよー！」

幾ら私でも『犬神家の一族』くらい知ってるんだからーーー！」

数m転がってから痛がる翔太に綺麗に着地まで決めた明日菜が吠え
る。

「あ、あのー。アスナさんビーフハンバーグ？」

「何言つてんの、いつまで経つても帰つてこないから心配で探しに来たんじやないのー！」

おどおどと質問するネギに先を変えて吠える明日菜。

実際時計を確認してみれば、良い感じに時間も過ぎて。

「とにかく、晩御飯も食べてないんでしょ？木乃香が夜食作つてくれてるから帰るわよ？」

「ちょ、ちょっと待つてくださいアスナさんーあれをビーフハンバーグー！」

腕を引っ張つて帰宅を促そつとする明日菜に、突き刺さつたままの吸血鬼を指差すネギ。

そっちの方を見て驚く明日菜。

「な、何よあれーーー？」

「今頃気が付いたのかよ…………『桜通りの吸血鬼』だよ。」

「ビーフハンバーグなってるのよ？」

何故にそんなものがこんな所で突き刺さつてるのか。

そんな彼女に大雑把に説明するネギ。

「と、言つ訳なんです。」

「へえ、凄いわね翔太つて…………つてちょっとーーー？」

慌ててネギを抱えて翔太から離れ、耳打ちをする。

「思いつきり翔太に魔法ばらしちゃつてる状態じゃないのこれ？」

「あ…………」

今になつてそれに思い立つたのか、真っ青になるネギ。
スーパー魔法大戦を目の前で繰り広げたような物である。CGと誤魔化す訳にも行かず。

「おーい、今になつてそれを言つのかよー？」

翔太からすれば物凄い勢いで今更の話で。

と言つが、今までそこにつれなかつたのがびっくりの話だ。
まあ、こいつから話を振るつもりも無かつたのだが。

「そ、その翔太さん、今日のこの事は…………」

「その話は後にしようや、今はこいつをビリするかなんだつてよ。

何しろバレたらオコジョである一びくびくしながらお願ひするネギ。
だが、翔太的には凄いどうでもいい事で。

いつまでもこのままにしておく訳にも行かない『桜通りの吸血鬼』
の処遇を考える必要がある。

「どうすると言つても…………警察に突き出すとか？」

「吸血鬼ですか？病院に連れて行かれるぜ？」

「そうよね…………ネギ、何か良い方法ある？」

神楽坂にそう聞かれ、考え込むネギ。

魔法関係者、それも悪い事をする魔法使いである以上はそのままと
言う訳にもいかず。

とは言えこののようなケースは彼にとつても初めてのことであり。

「吸血鬼、つて白木の杭が効くんだけか？」

「ちよつとちよつと、何する気なのよー?」

どこから持ってきたのか、木の枝を削りながらそう言う翔太。物凄い嫌な予感を感じる神楽坂。

「いえ、取りあえずは学園長に話を持って行つて……」

「申し訳ありませんが、それは勘弁願えないでしょつか?」

一先ず無難な所で落ち着かせよつゝと出したアイデアは新たに現れた一人に遮られる。

「あ、あなたはっ!」

「茶々丸さん!?」

「こんばんわ、ネギ先生、神楽坂さん。それに……」

「よう、すげえ久々じゃねーか。」

現れた彼女に手を上げて挨拶する翔太。

お久しぶりです、と現れたのは絡繆茶々丸。エヴァンジエリンの忠実な従者。

「お久しぶりです。猫たちも元気ですよ。偶には顔を見せてあげてください。」

「あー、わりい。」このんどのお前が面倒見てるつて思つたら行くのが面倒になつてな。」

ここ最近、猫の餌やりをさぼり気味だった翔太が頭を搔きながら苦笑する。

彼女が欠かさず餌をやつてるだろつと信用しての事なのだが、無責任には違ひあるまい。

「つて、何和んでんのよー？ それに何で茶々丸さんが！？」
「そ、そりですよ！ もしかして……『桜通りの吸血鬼』と関係
が！？」

いきなり和みモードの二人に突つ込みを入れる明日菜。
ネギとしても、自分のクラスの生徒が悪事に加担しているのは見過
ごせないわけで。

「はい、私のマスターですので。」

そう言いながら地面に突き刺さった『それ』に近づくと思いつき引
っ引つこ抜く。
ぽん、と言ひ音が聞こえたような氣もしたがきっと氣のせいだ。

「あ、あなたはエヴァンジロリンさんー！」

ネギが驚くのも無理はない。

土まみれで未だ絶賛氣絶中の『桜通りの吸血鬼』はやはり同じクラスの生徒である
エヴァンジロリン・A・K・マクダウェルその人だったのだから。

「じゃ、じゃあ『桜通りの吸血鬼』ってエヴァちゃんだったの！？」
「よく分からんが、そーなんじゃねーのか？」

さつきから驚きっぱなしの神楽坂に、吸血鬼と言ひ割にはよえーよ
なと思う翔太。

無論、決して吸血鬼が弱いわけではないし翔太が油断をしていたつ
もりもない。

ちとやりすぎたか？と思ひ程度で丁度良かつたな、と言ひ程度の認
識である。

「しかし、世間狭すぎるだろ……」「

ほやく翔太だが無理はない。

今この場にいる人間の二十七人を除いて全員顔見知りと言ふ状況なのだ。

3-A(旧2-A)の生徒とに学園祭の時に顔を合わせてしまふのが、エヴァンジェリノと茶々丸に関しては丁度その場にいなかつたので、同じクラスだとは知らなかつたのである。

「それで、失礼させて……」

エヴァを抱えたまま去つていぐべく足のロケットを噴かそうとする
茶々丸を止めるネギ。

この結果は意味が無いのだが

「…………どうかしましたか？」

「どうかしましたじゃありませんよ、何でこんな事をするんですか

魔法とは世の為人の為に使う物。

魔法使いは正義の味方、と言う固定観念を持つネギからすれば、その魔法で持つて

「そ、そりゃー、幾らクラスメイトだからってそんな事していいわけないでしょーーー！」

身近なクラスメイトが襲われているのだ。
神楽坂としても人事ではなく。

「残念ですが、それに関してはお答えすることができます。」

しかし、茶々丸にそれを答える権利は無く。
例えあつたとしても口を噤んだであろう。

「答えられない」というのなら………」

「ちよつと待つた。」

自身の生徒であつても、と悲壮な覚悟を決めるネギに割り込むのは
翔太であった。

「ちよ、ちよつと向で止めるのよ?」

「いやよ………」には一旦双方ひかねーか?このままだと不毛な争
いになるぜ?

改めて後日仕切りなおしでいいと思うがね。」

頭を搔きつつそういう翔太にネギが反論する。

「な、何言つてるんですか。僕の生徒が悪い事をやつてるんですよ
!?」

「いやよ、誰も見過ぎせとは言つてねーよ。」

お前としても物理的にぶちのめすのは本意じゃねーだろ?」
「それはそうですが………」

でなければ『学園長に話を』と書いた箇所は出でこないだろ?と翔
太。

確かに生徒に手を上げるのもどうなのか、とは思つネギ。

ましてや片方は完全に田を回して氣絶状態である訳で。幾らなんでも気が咎める。

「そつちの…… H、 Hヴァンゲリウムにしたつて今日は活動不可だろうしな。」

「マスターの名前はエヴァンジヨリンです。」

長い横文字が苦手なのか名前を間違える翔太だつたりする。

「明日の放課後にでも、スタブ辺りで話し合いつて事でどうだ？
もしかしたらそいつで分かり合えるかも知れねえ。血を吸つてる理由だつてわからねーんだろ？」

「…………思いつきりやらかした人間とは思えない台詞よね。」

ジト目で翔太を睨む神楽坂。

「あれは正当防衛だ。」

「嘘は言つてしませんけど…………」

きつぱりと言い切る翔太。

確かに間違つてないが囮捜査で正当防衛もへつたくれもないんじやないかなあ、と思つネギ。

「つーわけでどうよ？」

「私の一存では決めかねますが、マスターが氣がつきましたらお伝えしたいと思います。」

………… ですので、この『糸』を外していただけとありがたいかと。

「

あくまでも従者である茶々丸に決定権は無く。忠実に主人に仕えるだけなのだから。

「いや、わりいわりい。逃げられても困るしな。もし来ない場合は、しかるべき筋に通報するだけは言つておいてくれ。」

「畏まりました。では、おやすみなさいませ。」

悪氣の無い声で絡みつかせていた糸・と言つてもワイヤーなのだが、を解くと、結局田覚めることの無かつたエヴァンジエリンを抱えたまま、飛び去っていく茶々丸。それを見送りながら、ネギと明日菜は同時に呟いたのである。

『茶々丸さん、つて口ボットだつたんだ（だつたのね）…………』
「いや、何で気がつかないんだよお前ら。」

夜空に翔太のツツコミが小さく響いたのであった。

第九巻：忍者（時々魔法使い）VS吸血鬼！桜通りの決斗！！でござる、の巻

ネギの登校拒否フラグが消滅しました！

ネギ君を慰めると、さすがに逆セクハラ会が消滅しました！

水着を脱がして回る淫獸（仮名）が涙目です！

茶々丸を一人でぼっこる作戦が消えそうです！

再びへこんだネギの脱走フラグが消えそうです！

楓さんとのうれしそうかし山での混浴イベントが消えそうです！

ここ重要

と言つわけで次回はお話の予定です。

人間スペックにまで落ち込んだエヴァンジエリンさんに断わる理由
と言つか、

提案を蹴るメリットが無いわけでした……。

無論、停電の日に電力結界を落として元のパワーを取り戻せば別で
しうが。

とは言え、端からそれを知つてたわけでもないですからねえ。
……と言つことにしてくれると大変嬉しいです（何。

なるわけで）。
「そんなエヴァンジエリンさん
3巻によると満月を過ぎると魔力ががた落ちになるそいで。
牙すらない以上スペックはほぼ人間で（まあ、花粉症やら風邪やら
侵入者の感知は結界の効果みたいですし……しかし、そんな彼女
に侵入者探させていいのか？

万が一グロングリとかオルフェノクみたいなのが来たらどうする気だ
？（笑）

じゃあ、満月時の戦闘スペックはと言つとネギとの戦闘でも魔法を
レジストしきれてない

わけで（マントが吹き飛んで下着一丁ならまだ抵抗し切れてるのか
？なわきやねーよな）。

ネギの魔力が高い、と言うのを差つ引いても本当に大丈夫か？
戦いなれてる訳でないネギですら「魔力が弱い、勝てる！」と言つ
てるくらいだしな。

（多分に慣れてない上での油断・慢心もあるでしょうが。戦闘経験
だけならエヴァ圧勝だし。）

まあ、魔法薬を触媒にして魔法を行使する辺りで魔力の低さはお察
しですが。

そのための前衛である茶々丸でしょうけども。
エヴァ的には魔法使いは砲台、って感じみたいだし。

最悪合氣道が火を吹くだろうしなあ w

閑話休題。

満月を過ぎるとがた落ち、と言つことは夜中に襲えるのは月1回。
幾らなんでも満月前後はいけるだらう、と思つたもののエヴァが牙
が無いのを見せるのは

襲撃の翌日な訳で……この時点で既に吸血鬼としては終了してゐ
るといふ。

無論、魔法使いとしての魔力は吸血行為でばっちり、と言つ可能性
はあります。

しかしそれだと襲つても血は吸えない訳で……結局月1回しかな
い www

2月の半年前（赤松研より）と言つ事は8月くらいから吸血活動を

開始したそうですが、

月1と考えると9回の吸血を行った事になるわけでして。

……まあ、一応噂話に上がるレベルではあるのか。同じ場所でや
れば。

とは言え毎回満月の夜に血を吸われるとなると何で捕まらないん
だ、って話にw

1回目、2回目はともかく、4回5回となつても魔法先生方が動かな
いのはボンクラだろうとw

下でも書いてるけど「危険を冒して」と言つ事は内緒でやつてゐ
るだろうじ。

学園長は知つてゐる可能性もあるけども。

割りとつうである「壁になつてやつてくれ」と言つ依頼ですな。
だとすると、上からの圧力で調査しなかつた可能性もありなのが。

それはさておき。となるとまき絵の血を吸つたのはいい。のどかの
時はどうしてたんだ?

やつぱり満月から前後1日は何とかなるんだろうか。
と言つかそうでないとネギから血を貰えない。

満月1日前：

満月当日 …まき絵襲撃

満月一日後 …のどか襲撃

のようなスケジュールなら話とも矛盾しない訳で。

そういう訳で当作品は前後1日は吸血鬼として活動できることとし
ます。

……まあ、こじでしか使わないような設定ですがw

しかし、そう考へるとHウアさんが学園警備でオリ主と言つ名の不

審者発見した上で

戦闘してお話、と言つテンプレは使えなくなつてしまつたま満月だった、はいけどスペック的に凄い不安と言つか。吸血行為により魔力は充填されると考えても……なあ。

ピンチの所をオリ主さんに助けられる役なら問題ないだろつけどさ
あ w

しかし実際、吸血行為で魔力は充填できるんだろうか吸血鬼。

出来なきや問題と言つ氣もするけど、散々吸血行為を繰り返してあの魔力でネギと戦つた、

と考えると微々たる量なのか、と言つ感じもある。

無論、月3回の吸血で莫大な魔力を得られるのもおかしな話ですが。

血液はただの嗜好品でネギをおびき出す為の手段として就任半年前から事件を仕込んでた、
と言つのもありなのか。

来るというのを知つてると言つ事は、最低限の人となりくらいはリサーチできるだらうじ。

あくまでも解呪に必要なのは「血縁の血」と言つ触媒であつて魔力は関係無いとか……

と思つたけど、8巻で吸血で魔力補充してるんだよなあ（献血程度の）。

そもそも3巻の段階で「ひよっこ魔法使いのお前に対抗する為に危険を冒して学園生徒の

血を集めた甲斐が」と言つてるし……。

やはり魔力が封印されてる分を吸血で集めたと考えるのが妥当なの

か。

しかしそうなると、今度は封印時の満月の時のスペックが非常に弱い事になってしまつ…………。

吸血行為で半年間血を集めた魔力 + 満月時の吸血鬼スペックで挑んで負けかけるし。

手加減する理由もねーしなあ。あえて言つなら慢心ゆえの油断だらうけだ。

……連載当初と今じゃ 設定が別物、と言わればそれまでなんだけど。

そこまで戦闘力をインフレさせんつもりは無かつたと言つ事なのか。

と語つか俺は作品書いつとして何でここまで考へてるんだ？（おこ

>分身

本当にどこまで出来るんだろつか w

彼らなんでも情報の共有は出来無いだろひ、と思つてますが。

>ネギ VS ホヴァ（1回戦）
(のびか・エヴァ) 遠距離 (ネギ) と言つ初期配置からのスタート。

丁度エヴァの後ろにのどかが倒れてる、と言つ状況ですね。

しかし、戒めの矢を撃つてそれを氷盾で弾いた時にはのどかをカバーできる位置にいるといつ。

呪文を発動したのはエヴァの後ろ。しかし防いだのはのどか側……
……どーなつてんのセ?

Hヴァンの背中に着弾するように撃ち込んだ、と言つなり別でしきつ
けどさ w

と言つわけでも若干弄つております。

「都合主義とも言つ。

「みつともないHヴァンジエリンせん
矢の飛ぶスピード考えるとまにあわねーだる、とも思つてしまつが
気にすんな（え

「高下駄

30cmほどフォローする必要があるんですけどね w
まあ、大丈夫でしょう忍者だし（何

「犬神家

もし分からぬ方は仮面ライダーベルテのファイナルベント・デス
バーチシユを喰らつた後を
イメージしていただければ分かりやすいかもしれません。

どつかの突つ込みであつたな。大型ミラーモンスター相手にあのフ
アイナルベントは
どつかつて決めるつもりでいるんだろう、つてこうの w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1407o/>

麻帆良に忍！

2011年7月30日22時11分発行